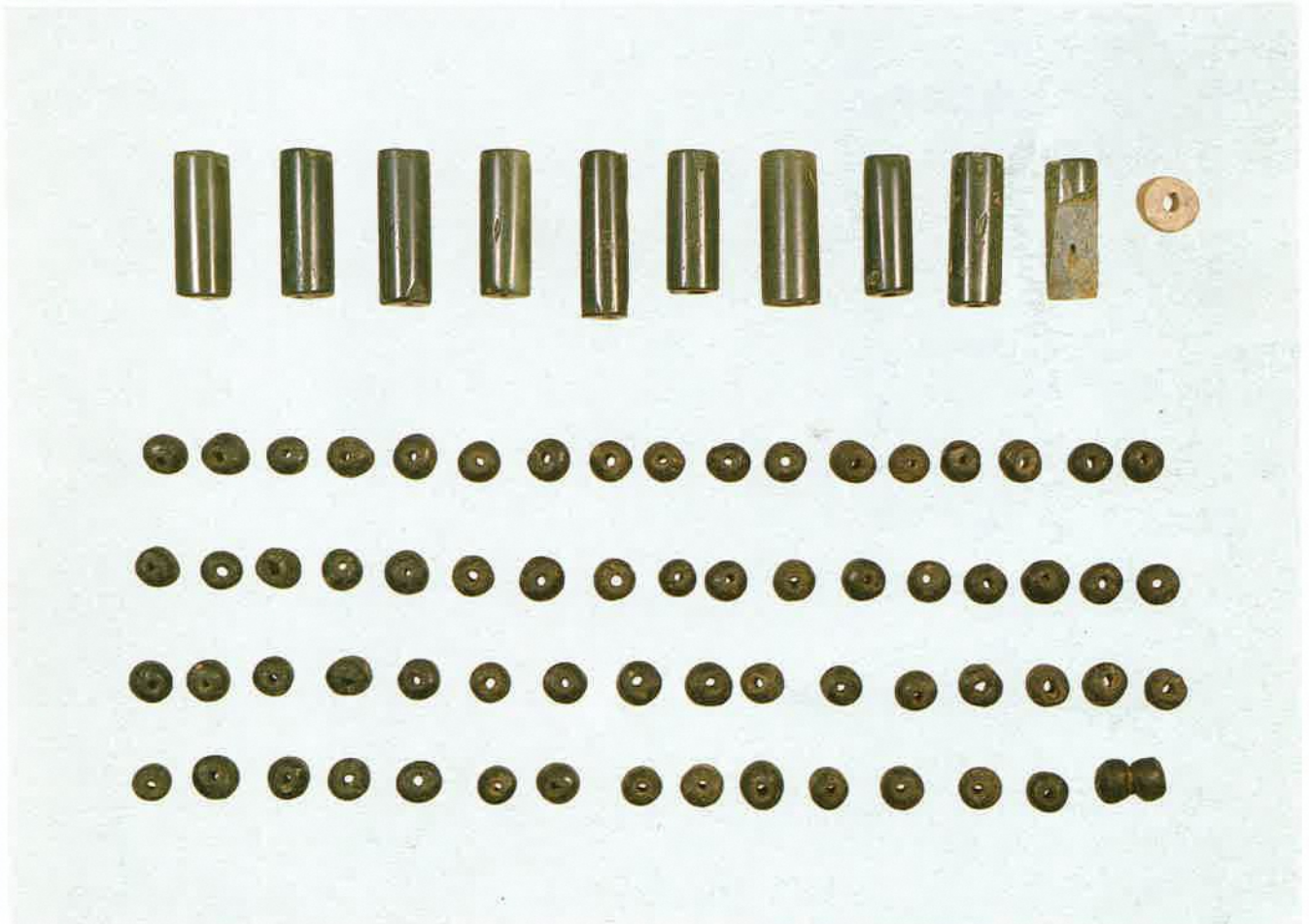
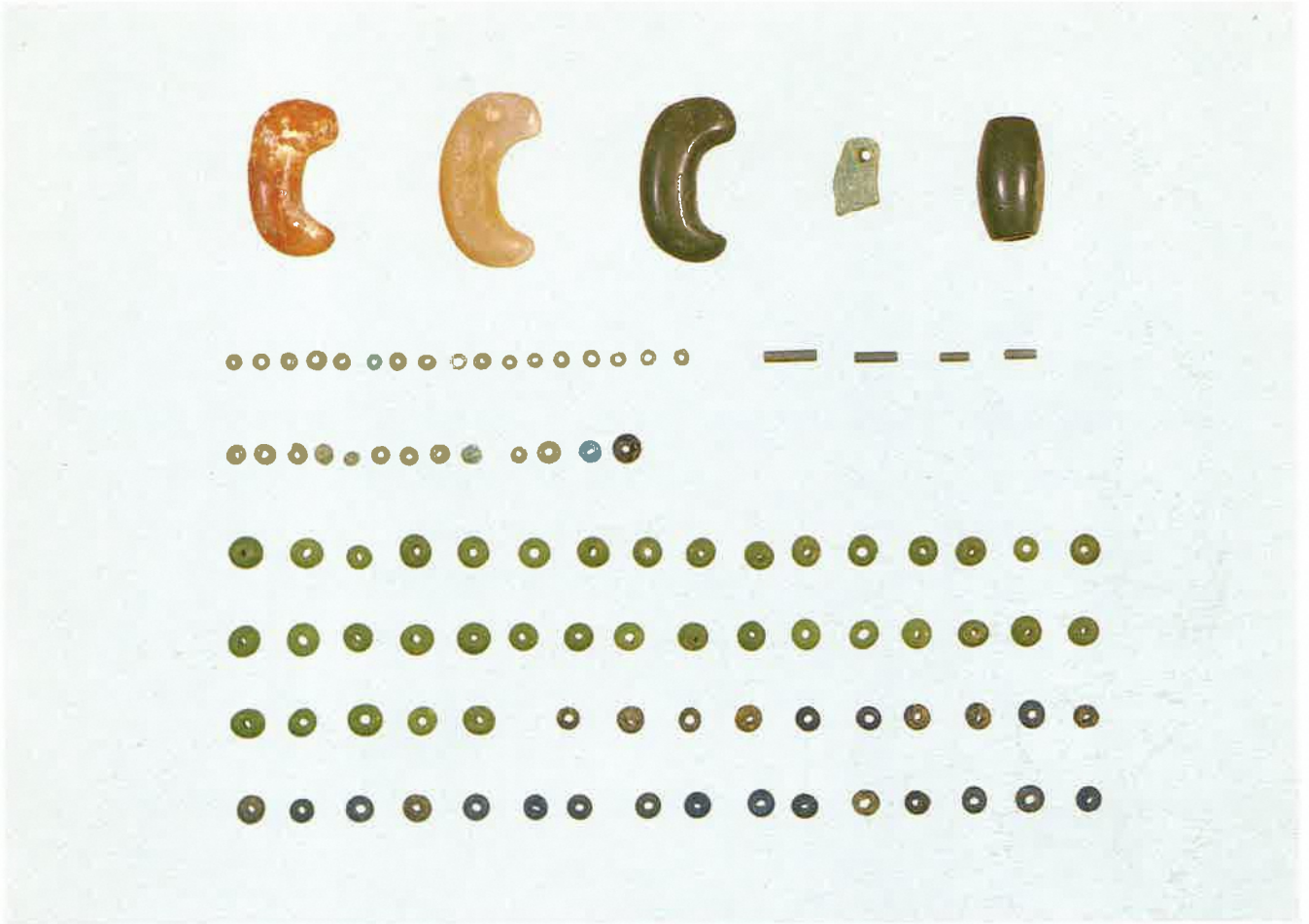


三大寺遺跡群

—坂田郡米原町大字枝折所在—

1984

米原町教育委員会



上、塚原2号墳出土玉類 下、塚原3号墳出土玉類

序 文

米原町は現在東海道本線と北陸線の分岐点として、また東海道新幹線が走るといった、交通の要衝地であります。この地理的条件は古くより同様であり、畿内・東海・北陸地方の接点として、各時代の文化財を数多く有しております。

三大寺遺跡は古くより藤原宮式瓦の出土が知られておりましたが、その構造はまったく不明でした。今回枝折地先で団体営ほ場整備事業が行なわれることとなり、事前に発掘調査を実施しましたところ、多量の瓦の出土とともに、寺院の基壇が確認され、三大寺の実態が明らかになりました。これに加えて横穴式石室を有する古墳や、平安時代の掘立柱建物群も検出され、本町の歴史がより豊富なものとなりました。

今回の調査に御協力いただきました県教育委員会および地元関係者の方々に対して厚くお礼を申し上げます。

最後に本書が多くの方々に活用して頂けますならば幸いです。

昭和59年6月

米原町教育委員会
教育長 福田定親

目 次

序 文	
例 言	
はじめに	1
1. 位置と環境	1
2. 調査の経過	4
3. 遺構の分布	4
4. 塚原古墳群	7
イ. 1号墳	
ロ. 2号墳	
ハ. 3号墳	
5. 竪穴式住居跡群	22
イ. 遺 構	
ロ. 遺 物	
6. 基壇跡	24
イ. 遺 構	
ロ. 遺 物	
7. 掘立柱建物跡群	30
イ. 遺 構	
ロ. 遺 物	
8. 総 括	34
附. 人骨鑑定書	35
おわりに	46

例 言

1. 本書は、滋賀県坂田郡米原町大字枝折地先に所在する三大寺遺跡群の発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、昭和55年度に国庫補助事業として滋賀県教育委員会が実施した試掘調査の結果にもとずき、昭和57年度に、団体営ほ場整備事業に先立ち、米原町教育委員会が国庫の補助を受けて実施した。
3. 調査経費は5,000,000円で、50%を国庫、25%を県費の補助を受けた。
4. 調査は、昭和57年12月から昭和58年3月まで4ヵ月を要した。
5. 調査の体制は次の通りである。

米原町教育委員会

教育長 福田定観

社会教育係々長 相宗又兵衛

〃 主事 山形寛吏

〃 〃 鏝田 進

滋賀県教育委員会事務局

文化部文化財保護課 主査 田中勝弘

財団法人 滋賀県文化財保護協会

技 師 吉田秀則

嘱託調査員 中川正人

調査補助員 田中秀和、北村玉男、福本真隆、国川三紀、溝口勝隆、北川 保、渡辺康彦、塚越正之、田村 清、川村直樹

6. 調査は、米原町教育委員会の依頼により、滋賀県教育委員会事務局文化部文化財保護課主査田中勝弘が担当した。
7. 本書は、田中勝弘が執筆し、編集した。
8. 人骨の鑑定については、滋賀医科大学法医学教室教授龍野嘉紹、同大学口腔外科教室教授佐藤匠両先生に依頼した。本書には鑑定書を原文のまま掲載した。
9. 本書は、概要報告書であり、正報告書については後日刊行の予定である。出土遺物等については、当分の間、滋賀県埋蔵文化財センターで保管していただいているので、御活用願いたい。

はじめに

三大寺遺跡群は、寺院跡、古墳群の他に、今回新たに検出した集落跡を総称するものである。寺院跡は、寺尾、塚原の両小字を中心に多量の瓦が出土しており、附近に、随泉寺、福遊寺、多聞寺等寺院が存在していたという伝承のあるところから推察されてきたものである。瓦の発見は、明治36年、現在の醒井小学校の校舎の増改築の際に多量に出土した時点までさかのぼる。その後、小学校の所在する小字寺尾の西部だけでなく、枝折川をはさんだ南側、小字塚原の西寄りにまで及んで瓦の出土することが知られるようになった。しかし、これまで何等の調査の手が加えられておらず、寺院の伽藍配置はもちろん、寺域等についても全ったく不明であり、小学校々地より出土した瓦のみが広く学界に知れわたり、現在に至っている。

塚原古墳群については、小字塚原の東寄りに巨石が露頭している個所があり、すでに、横穴式石室墳の存在は周知されていた。ただ、周知されていたのは1基のみであり、古墳時代後期の群集墳の通例として、さらに数基の存在が推察されたし、事実、附近を詳査したところ、石垣の石材の様子から、さらに、少なくとも2基程度存在するのではないかと考えられた。

集落跡については、以前の分布調査で、須恵器や土師器の散布を確認していたが、むしろ、寺院跡や古墳に伴うものと考えていたものである。

このような状況のなかで、枝折地先で団体営ほ場整備事業が計画されることとなったのである。工事は、枝折川以南一帯に及ぶものであり、事前に発掘調査を実施し、遺跡の範囲や性格等を明らかにし、遺跡保存のための方策を構じる必要性が生じたのである。調査は、昭和55年度に、滋賀県教育委員会によって試掘調査が実施され、その結果にもとずき、昭和57年度に詳細な発掘調査を実施した。

調査に当たっては、地元枝折区の方々、米原町土地改良課の方々には御世話になった。また、北川武太郎・前川文彦の両氏には、器材や出土遺物等の置場として家屋を提供していただいた。さらに、膨大な量の出土瓦の洗浄に

ついては、米原町文化財保護審議員河内美代子氏の口添えにより、日赤奉仕団米原支部（代表松井好枝）の方々の御援助をいただいた。ここに記して感謝の意を表します。

1. 位置と環境(図1・2)

当遺跡群は、坂田郡米原町枝折宇寺尾・塚原を中心とした範囲にある。今回の調査対象はその南半部、小字塚原の全域である。

地理的には、北に天ノ川が西流し、西に靈山岳に端を発し、天ノ川に注ぐ丹生川が流れている。天ノ川は多和田山の南側山裾を流れるが、この河川の南側に沿って中山道が通過している。従って、当遺跡群は中山道沿いの南側にあつて、醒井溪谷の谷口に位置し、西を丹生川、北を天ノ川、東と西を靈山岳に続く山丘にはさまれている。塚原地先は標高121～126m附近にあり、旧地形は、枝折川に沿って、およそ西北西方向に張り出した舌状の台地となっている。

遺跡群の北側を通過する中山道は、東へ5km程、山東町柏原附近で北国脇往還道と合流し、西へ8km程行けば、彦根市鳥居本附近で北国街道に至る。さらに、近江と美濃との国境にあたり、古代三関の一つとされている不破関までは、わずか東へ10km程であり、天ノ川沿いに西へ行けば6km程で朝妻の港へ出ることができる。このように、当遺跡群の位置は、中山道を南下する陸上交通、西行して琵琶湖を利用する湖上交通の両手段を選択できる交通上の要所を占めるとともに、不破関が近接するように、東国との交流を左右できるネックとなる地理的環境にあるといえる。

現在の枝折は、小字清水に集落を持つが、その西方の小字平内、寺尾、高瀬の三部落を合せて枝折村とし、中山道に沿った集落であつたらしい。枝折の地名は新しく、江戸時代以降に現われるようである。醒井、一色、枝折、上丹生、下丹生、樽が畑の6ヵ村が合併して、後に醒井村と称しているが、この醒井村の範囲が日本書紀等に見る醒井の範囲と考えてよからう。従って、当遺跡群は醒井の北西部を占めることになる。醒井については、日本書紀や古事記に、日本武尊命の東伐の記事の中に、地名

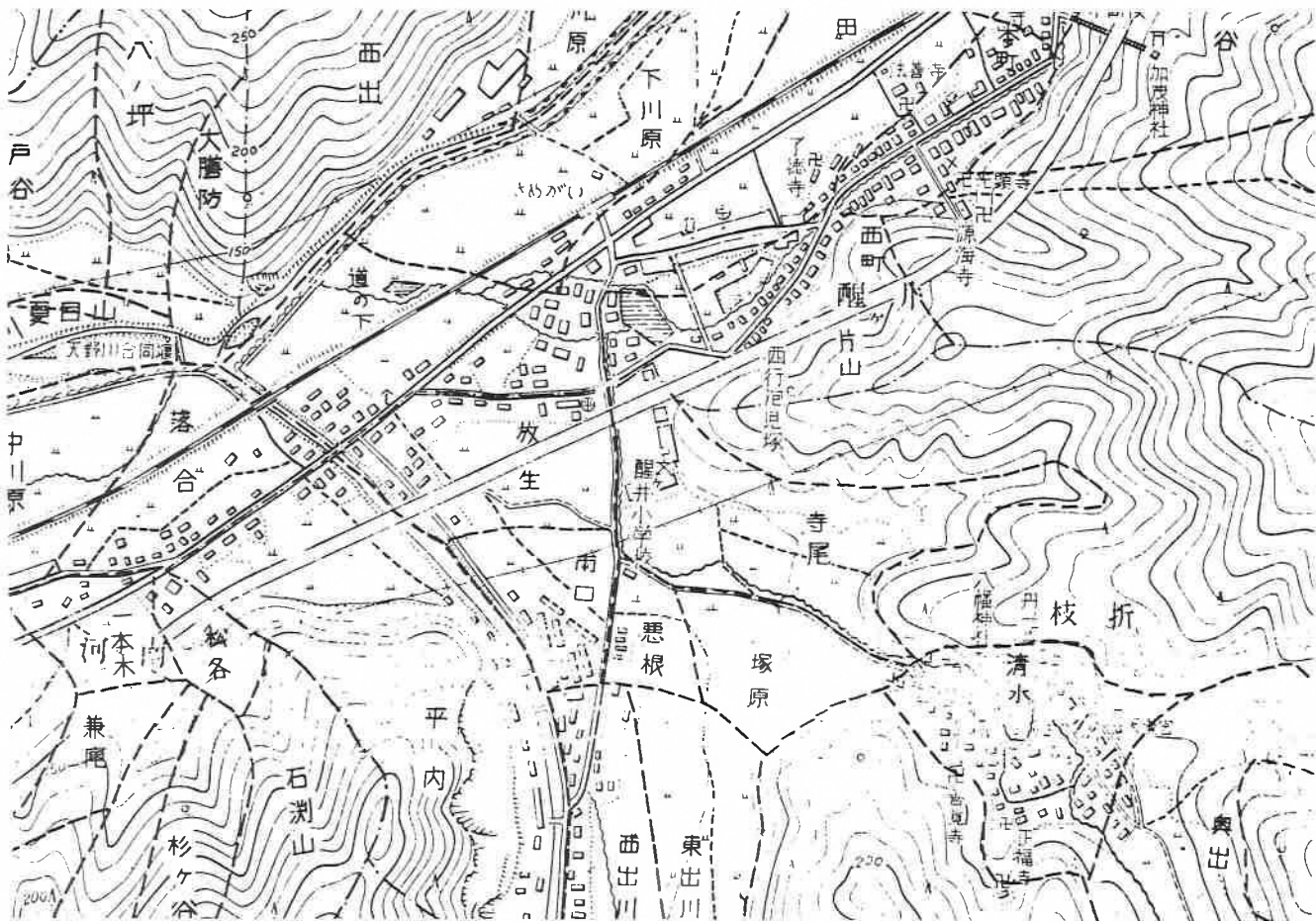
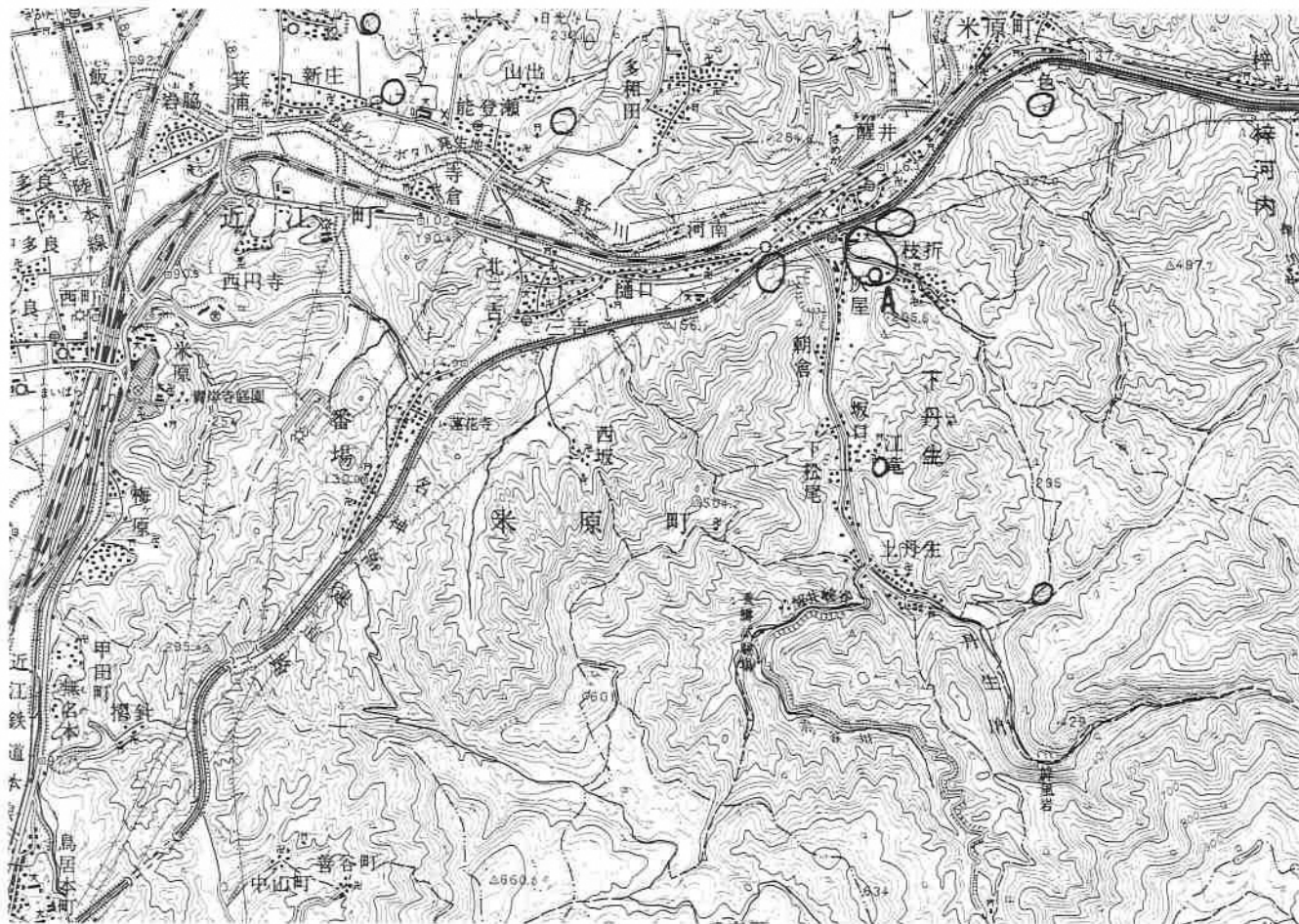


図1 (上) 遺跡位置図(A) (○は古墳及び古墳群)
 (下) 附近小字図

の起源説話を掲載している。また、日本書紀天武天皇上元年（壬申の乱）条に、『近江放精兵忽衝玉倉部邑。則遣出雲臣狛、擊迫之』や『丙申、男依等、與近江軍、戰息長横河破之。斬其將境部連葉』等の記事があり、醒井附近に玉倉部邑や息長横河等の地名の存在したことが知れる。横河については、続日本紀天平12年（720年）12月条に、『戊午、從不破發至坂田郡横川頓宮』の記事が見える。地名説話はもとより、壬申の乱に関連した玉倉部邑や息長横河、また、横川頓宮等の正確な位置は不明であるにしても、醒井附近として大過ないと考える。

このような、地理的条件を一つの背景に、当遺跡群近辺には、丹生川をはさんだ西側丘陵裾部に石淵山古墳群、当遺跡群内に含まれる塚原古墳群等の古墳時代後期群集墳が集中し、北側の片山の丘陵尾根上にも、円墳数基から構成される片山古墳群がある。これら丹生川河口付近だけでなく、丹生川をさかのぼる狭い溪谷にも、下丹生の丹生古墳、上丹生の狐塚古墳等の後期古墳が築造されている。天ノ川流域では、この地域以外では、天ノ川北

側の近江町能登瀬、顔戸、高溝にかけての山丘南側裾に、山津照神社古墳、塚ノ越古墳、人塚古墳等の前方後円墳と考えられているもの、さらに、ハニワを持ち、径20mを計る狐塚古墳等首長系譜の墳墓と思われるものが分布している。また、その河口附近南側に、磯山古墳群があり、特異な方形プランの玄室を持つ横穴式石室で構成されている。このように三地域に分布圏を持つとともに、いずれの地域にも白鳳時代に寺院の建立を見ていることも注意に値する。ただ、当遺跡群の場合、その背景となる生産基盤を見た場合、他の二地域に比べて極めて貧弱である。このことは、当遺跡附近が、政治的、社会的に極めて重要な位置を占めていたことを端的に物語るものであろう。

なお、醒井を含めた古代朝妻郷は、応神天皇の皇子稚渟毛二岐王の後裔とされる近江の名族息長氏の根拠地とされ、醒井附近は、分柱した息長丹生真人の居住地であったと傳承されている。



遺跡遠景(西より)

2. 調査の経過

当遺跡群は、明治36年の醒井小学校々地からの瓦の出土と塚の伝承地の存在から、寺院跡と古墳群の所在する遺跡として周知されていた。昭和53年度に、醒井小学校の南に隣接して、米原町立幼稚園の建設が計画され、これに伴って米原町教育委員会が発掘調査を実施している。当遺跡群に対する初めての発掘調査であったが、限られた範囲の調査であることもあって、一条の溝跡と奈良時代の須恵器や瓦を出土したのにとどまり、遺跡の性格等を明らかにするまでには至っていない。昭和54年度には、枝折地先の枝折川以南では場整備事業が策定されることとなった。このことに伴い、昭和55年度に、滋賀県教育委員会が国庫補助を受けて試掘調査を実施し、遺跡の範囲や工事による影響等の確認が行なわれた。この結果を受けて、ほ場整備関係機関と協議を重ね、ほ場整備工事は57・58年度の2ヵ年計画とすること、調査対象地域については58年度に工事を実施することとし、発掘調査はその前年の57年度に実施すること、重要な遺構が検出された場合、極力保存をはかること等で合意し、工事と発掘調査、開発と保存との調整をはかった。調査は、昭和57年度事業として、米原町教育委員会が国庫補助及び県費補助を受けて実施した。調査は、一部7月に実施したが、本格的には、12月から、一時積雪による中断期間をはさんで、翌年の3月までの4ヵ月間を要した。

なお、検出された遺構群は、地元の方々やほ場整備関係機関の方々の御理解を得て、頭初の設計に変更を加え、再び地下に、ほぼ完全に埋め戻されている。また、塚原1号墳については、現状のまま保存されるとの内諾を得ていたため、今回の調査対象から除外した。ただし、ほ場整備工事完了後、現地確認したところ、1号墳の所在が不明なまで耕地化されており、現状保存とは言えない状態であった。

3. 遺構の分布(図3)

検出した遺構は、従来より知られている塚原古墳以外に、新たに2基の横穴式石室墳、基壇跡1基、竪穴式住居跡群、掘立柱建物群等である。

基壇跡は、小字塚原地先の西端附近で検出している。基壇跡の西方40m程のところ、およそ2m程の落差のある段差があり、従って、西北西に張り出した舌状台地の先端近くに位置していることになる。塚原1号墳は基壇跡の南東約40mのところ、新たに検出した2基は、約10mの間隔をおいて東西の位置関係にあり、東に位置する2号墳は、1号墳の南約15mの距離にある。3号墳も基壇跡からは南東約40m程のところにある。いずれも西に開口し、舌状台地の南傾斜面に直交して構築されている。古墳群と基壇跡との間にはおよそ1m程の落差を持つ段差がある。竪穴式住居跡群は、基壇跡に隣接した南側で3棟を検出している。この他に、基壇跡の下層については調査していないが、基壇の北辺中程附近で、土師器の鍋を伴う焼土、西辺中程で焼土、西辺より西側10m程の所で、カマドの痕跡かと思われる焼土壇を確認している。従って、竪穴式住居跡群は、基壇跡の部分を含み込んで、その南及び西側に広がっていたものと思われる。基壇の北側や古墳群のある東側では、住居跡の痕跡は認められなかった。削平を受けていることも考慮しなければならないが、集落としては、古墳群より西方、地形的には、舌状台地の低所側に立地していたものと考えてよからう。掘立柱建物群は、基壇の南側で、3基の竪穴式住居跡と重複して13基を検出している。

なお、基壇跡は1基のみ検出しているが、この基壇跡も含めて、周辺は相当削平を受けており、さらに別の建物が存在していた可能性も考えられた。しかし、基壇の西側は、40m程で2m近い段差があり、それまでの間は緩傾斜面となっている。南側は、幅50m程の住居群地域をはさんで、旧河道状の湿地となっている。北側は約50m程で枝折川に達する。東側は40m程で古墳群に達し、寺域外と考えてよい。瓦の出土地点も、従来よりこの基壇跡附近に集中している。このように、この基壇跡以外に建物が存在していたことを考えさせる条件が極めて少ない。従って、少なくとも枝折川以南では、一字のみ建立されていたと考えることができる。



図2 地形図及び遺構分布図

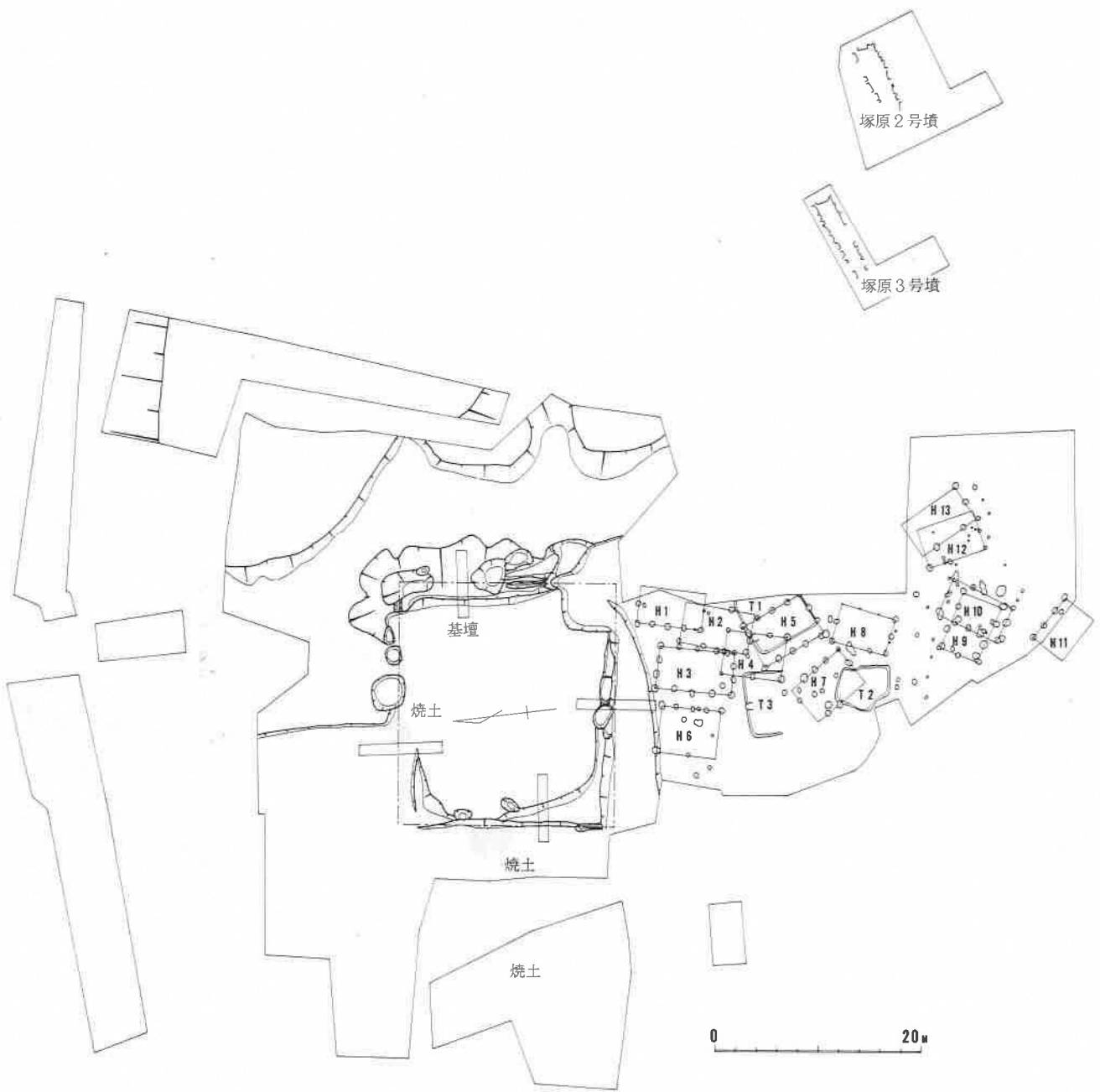


図3 遺構配置図

4. 塚原古墳群(図4・5・8)

イ. 1号墳

昭和55年度に試掘調査のみ実施している。墳丘は、天井石が露頭し、また、北側に倒壊しているものもあり、相当流失しているものと思われるが、現状では、長径14m、短径9m程の楕円形を呈している。主体部は、西に開口する横穴式石室で、ほぼ東西に軸線を持ち、旧地形の傾斜面に直交して構築されている。天井石は玄門附近の一石のみ遺存し、他のものの一部は北側に倒壊していた。側壁は、玄室部分がほぼ完存し、羨道部分は、入口附近が破壊されて消失し、側壁も最下段のみを残す部分が多い。完掘していないので、側壁の上端で計測すると、現存長10.8m、玄室の幅2m、長さ5.3m、羨道の幅1.5mであった。石材は、すべて附近で産出する石灰岩で、内面に面取りのみられるやや大型の割石を使用している。奥壁は五角形の一石を用いている。羨道部分に設けたトレンチから、須恵器の直口壺と高杯とが出土している。

ロ. 2号墳

N72°30'Eの方向に軸線を持ち、やはり旧地形の傾斜面に直交し、西に開口させて構築されている横穴式石室であった。奥壁の石材は抜き取り穴が2孔あり、大小2石を使用していたようである。玄室は、北壁が玄門石を含めてわずか4石しか遺存しておらず、比較的良く残っている南壁も1~2段分までであった。羨道は北壁が1石、南壁が3石までで、入口部分は残っていない。現存7.2m、玄室長4.24m、玄室幅1.6~1.8m、羨道幅1.4mを計る。玄室は奥壁側がやや広く、玄門部は石材を縦位置に置いて玄室と羨道を区別し、両裾の形式を取っている。石室床面には敷石等の施設はなく、玄室と羨道とを界する施設も認められない。玄室の奥部には、玄室の長軸に直交し、南壁の奥部から一石目と二石目との間に、板状の石材が横位置に立て置かれていた。石材は、側壁石材と異り、床面の直上にある。この石材は、玄室の南側2分の1をふさぐ状態にあるが、3号墳の例からして、本来、北側2分の1をもふさぐように、さらにもう一石



塚原2号墳全景(西より)



塚原2号墳遺物出土状態(北より)



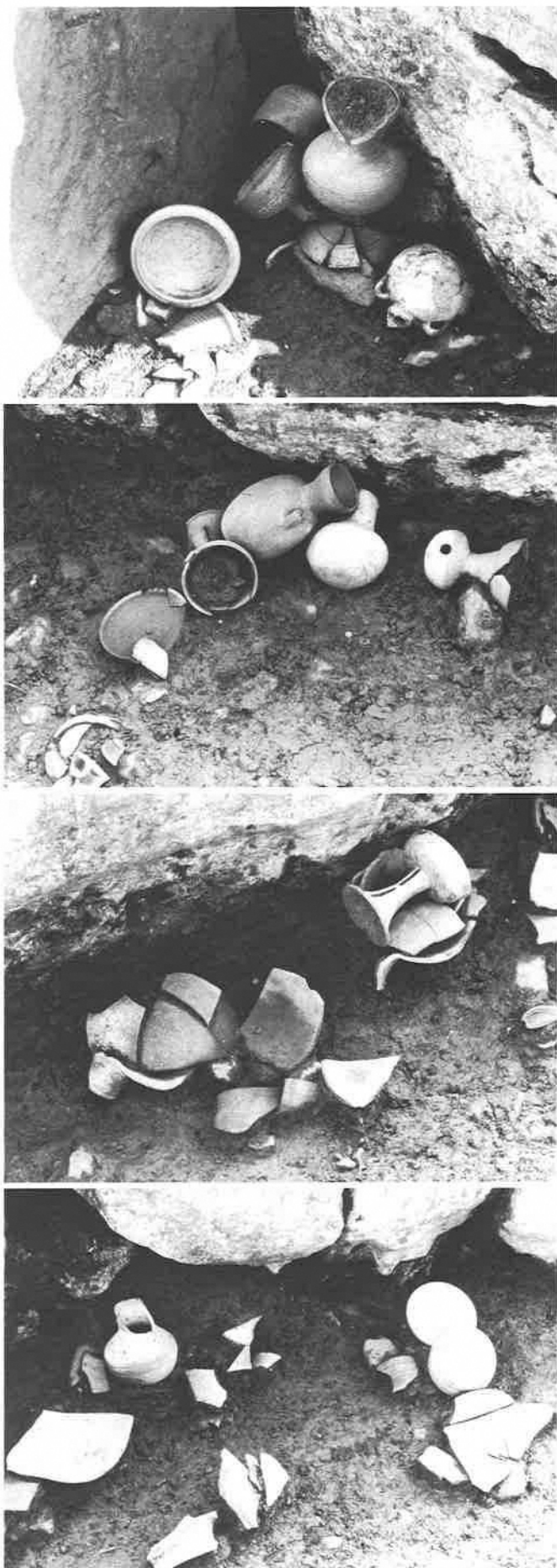
塚原2号墳遺物出土状態(南より)

が立て置かれていたものと考えられる。従って、玄室奥部に、玄室幅の長さで、奥行き0.8 m程の小室を作り出していたものと思われる。この小室には、45~25cm×25~10cmの規模で、厚さ10cm前後の板状石材が、玄室長軸に直交する方向に、一列に並べられていた。4石まで遺存していたが、空隙部から5石を並べ敷いていたものと思われる。後述する人骨の有り方から、棺台的な施設であろう。石室に使用されている石材は、すべて石灰岩である。

石室の遺存状況に比べ、副葬品、さらには埋葬人骨の遺存状況は極めて良好であった。副葬品には、須恵器、土師器、鉄製品、馬具、装身具等がある。須恵器は、杯、蓋、有蓋高杯、無蓋高杯、提瓶、平瓶、横瓶、甗、台付長頸壺、直口壺、短頸壺、埴、の12器種、土師器は壺の1器種で、唯一1点のみである。鉄製品は鏃、刀子、馬具は雲珠、帯金具、装身具には勾玉、管玉、ガラス小玉、石製玉等がある。これらは、その出土状況から5~6のグループに分けることができる。各グループの器種構成は次表の通りである。

	土師器	杯	蓋	有蓋高杯	無蓋高杯	提瓶	平瓶	横瓶	甗	台付長頸壺	直口壺	短頸壺	埴	鉄製品	馬具	装身具
1		○	○	○	○	○				○			○	○	○	
2		○	○		○	○			○		○			○		
3		○	○		○	○		○			○					
4		○	○			○	○				○		○			
5	○	○	○	○	○	○			○	○		○	○	○		
6		○	○	○	○	○						○				

各グループとも杯及び蓋は複数個あるが、他の器種は各1点ずつでセットを構成している。第1グループは7器種、鉄製品、馬具、第2・3・4グループは6器種で、第2グループに鉄製品が加わる。第5・6グループは混在していて区別しがたいが、須恵器9器種に土師器が加わる。須恵器の甗と台付長頸壺とが1個体であるが、他のものは2個体有り、2グループのものが集積されていると考えてよからう。鉄製品は、このグループの奥壁側半分に多く、入口側半分には鏃1点のみが出土している。装身具については、第5・6グループより奥壁側1 m程離れて金環が1点、他のものは、玄室奥部に設けられた



塚原2号墳遺物出土状態(1)

小室より出土した頭骸骨に装着されたまま出土しており、出土状況からだけではどのグループに帰属するかは判然としなない。

埋葬人骨は、形状の良好なものだけで、頭骸骨3点、その他の部位のもの41点を数える。これらの出土状況から見て、小室内の一群、玄室南壁側の一群、北壁側の一群の三群に分けることができる。小室内の一群は、板石を一行に敷き並べた上に、再安置されたようで、小室の南側に頭骸骨、北側中部に、その他の部位のものがまとめて置かれている。頭骸骨1、左大腿骨1、右脛骨1、不詳のもの2で一体分の人骨と考えてよい。頭骸骨や歯牙の所見から20才以上の男性と考えられている。玄室南壁の一群は、頭骸骨2、右大腿骨2、左大腿骨2、左脛骨1、右脛骨1、右尺骨1、左尺骨1、右橈骨2、右上腕骨2、左上腕骨1、右腓骨2、左腓骨1、左右不詳の腓骨1、不詳のもの1で、2体分の人骨がまとまっている。頭骸骨2点が最奥部にあって左右に並べ置かれ、他の部位のものが、石室の長軸方向に、長さ1.6m程にわたって出土している。下半身の脚部の骨が人口側、上半身の各部位のものが奥壁側にあり、埋葬後の乱れが極めて少ない。頭骸骨、歯牙の所見では、北側の頭骸骨は50才以上の男性、南側のものは40才以下(歯牙の所見では若年)の女性とされている。南壁の一群は、左大腿骨2、右大腿骨4、左脛骨1、右上腕骨4、左上腕骨1、左右不詳上腕骨1、左右不詳上腕骨1、右橈骨1、左橈骨1、右尺骨1、左尺骨1、右腓骨1、不詳のもの2で、少なくとも4体分の人骨が考えられる。他の2群程の整然さはない。推定される性別はすべて男性であるが、左大腿骨の8は比較的若いとされている。所属不明の歯牙の中にも未完成歯があり、いわゆるハイティーンの年齢のものがあるとされている。

以上の出土人骨からすれば、計7体の埋葬が考えられる。このうち1体が女性、また、20才に満たないものが1体が含まれる。幼児骨が含まれていない点注意される。これら人骨の埋葬順位については、小室内に副葬品が持ち込まれていないこと、小室が石室構築以後、新たに作り付けられていること等から、小室内のものが第1次の埋葬と考える。南壁の一群は、その一部のもの副葬品



塚原2号墳遺物出土状態(2)

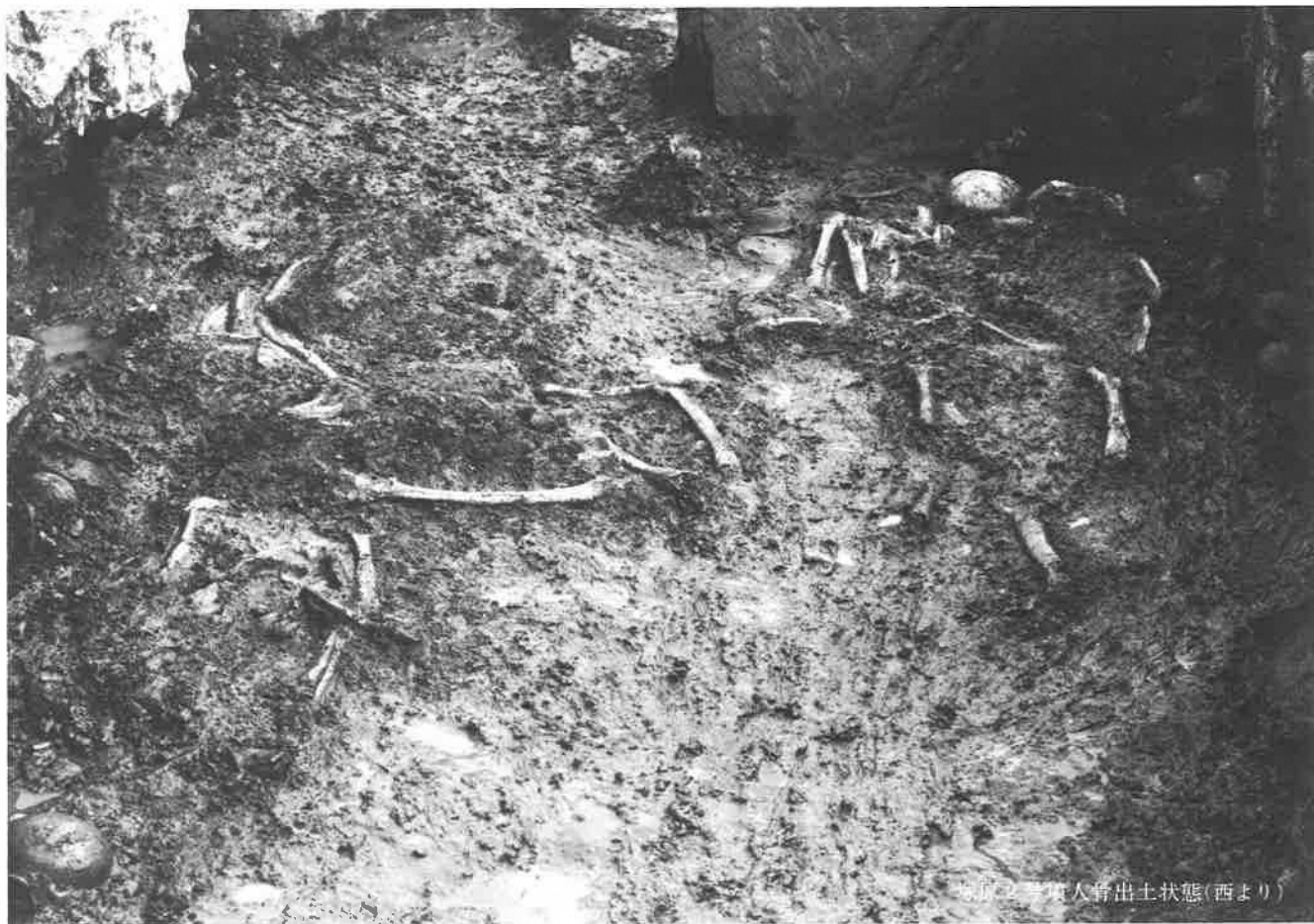
の第2グループのものの上に人骨がのっており、また、埋葬時の状態を良くとどめている。このことは、以後の追葬がなかったものと解してよく、最も新しい埋葬と考えられる。北壁の一群は、4体分が雑然と寄せ集められた状態にあり、以後の追葬によるものと考えられる。従って、小室の一群→北壁の一群→南壁の一群という埋葬順位が考えられる。南壁の一群の2体分は、同時埋葬である可能性が多分にある。北壁の4体分が4次にわたる埋葬と考えれば、計6次にわたる埋葬が行なわれたこと

になり、副葬品の6グループと整合する。

副葬品、埋葬人骨について、その出土状況等から6次にわたる埋葬が考えられたが、副葬品のうち、各グループに共通してみられる杯類を見ると次のようになる。

I. 口径12.3cm、器高5.6cmを計るもので、体部は丸味を持ち、外底面の約2分の1近くを篋削り調整している。受部は小さく、口縁部は直線的で、内傾している。

II. 口径13.2cm、器高4.9cmを計る。体部はやや扁平で、外底面の4分の1程に篋削り調整痕が認められる。



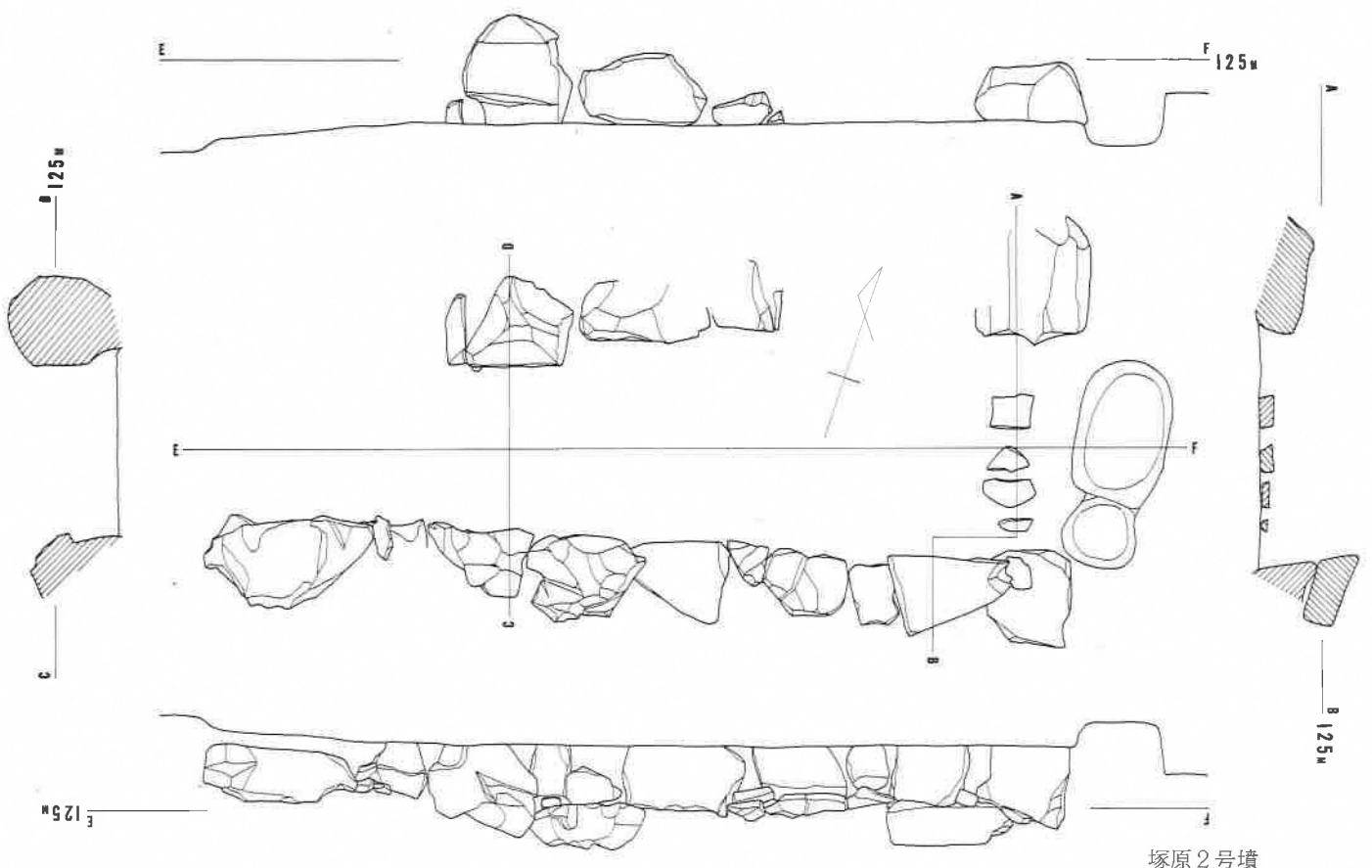
探原2号墳人骨出土状態(西より)



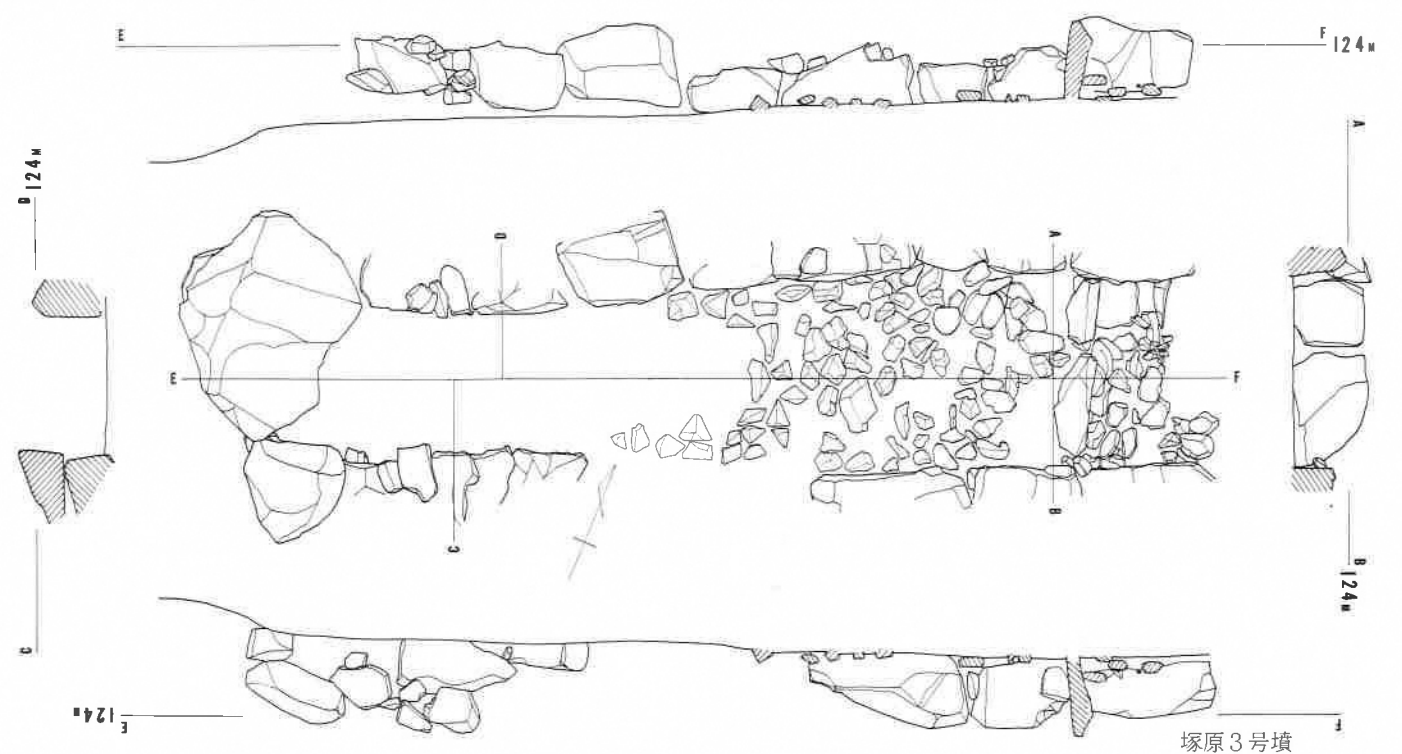
探原2号墳A・B頭骨



探原2号墳B頭骨



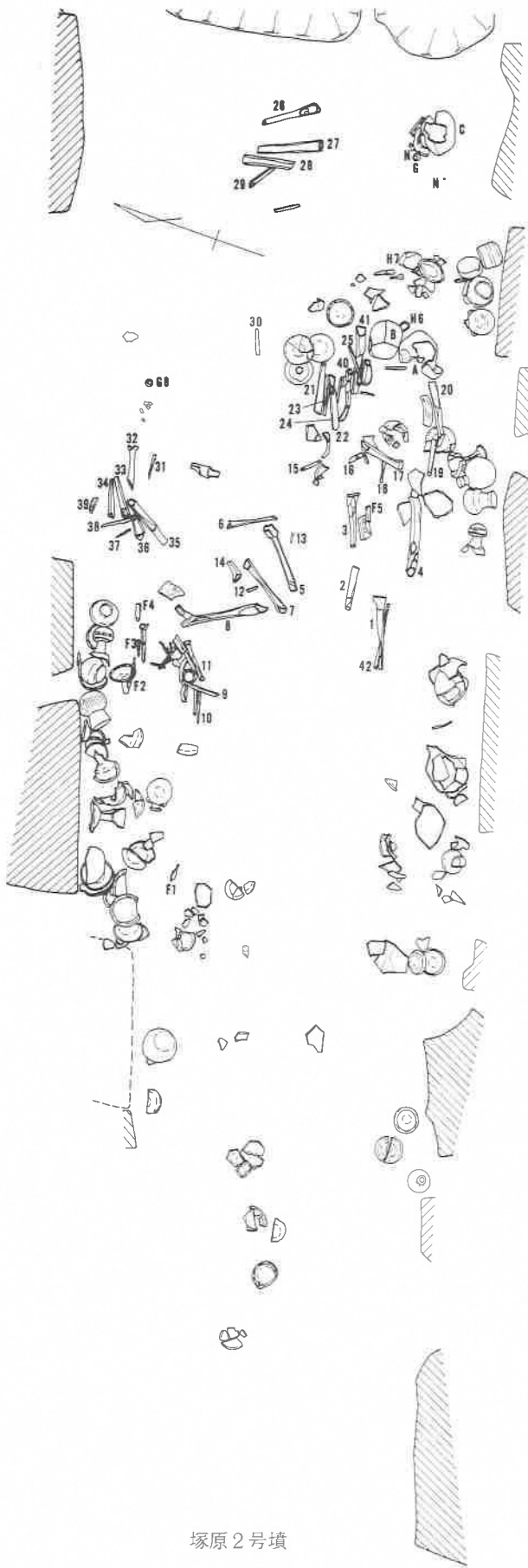
塚原2号墳



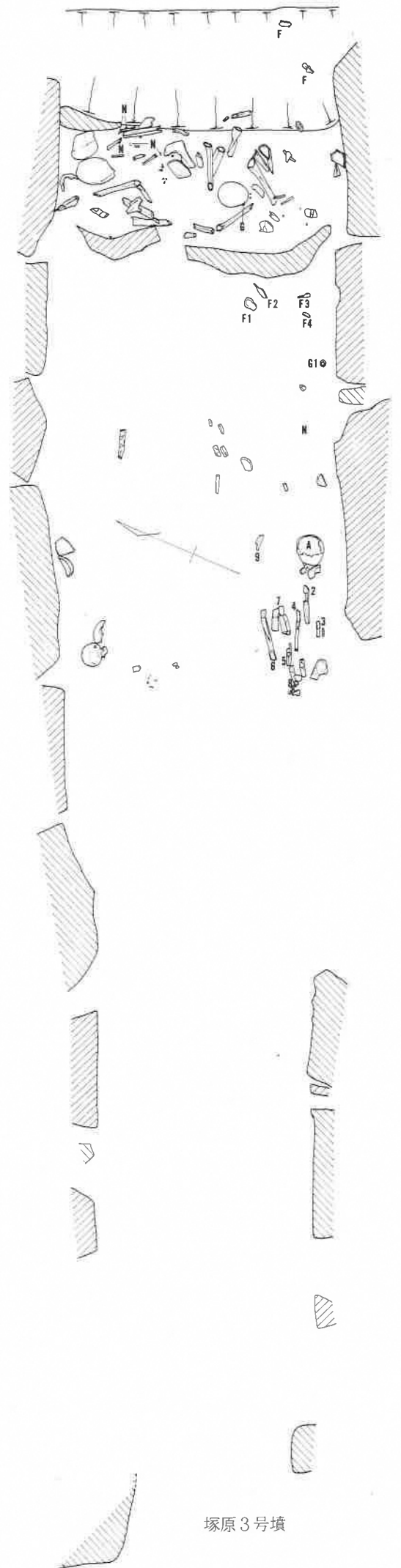
塚原3号墳



图4 塚原2号·3号墳石室实测图



塚原2号墳



塚原3号墳

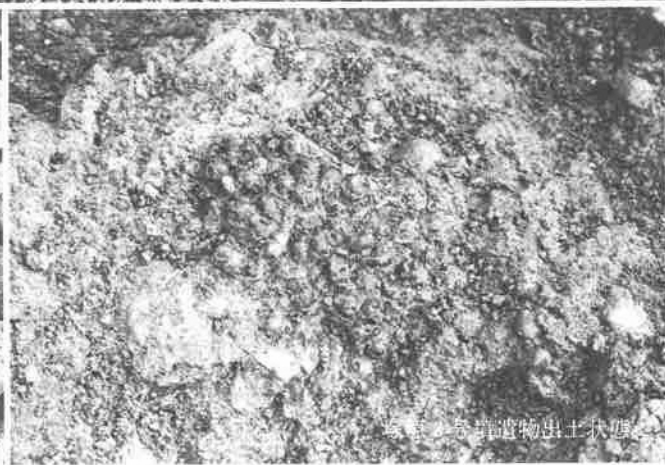
図5 塚原2号・3号墳遺物出土状態実測図(番号及びA~C:人骨、F番号:鉄製品、H番号:馬具、G番号:金環、N番号:装身具)



塚原3号坑全景(南より)



塚原3号坑遺物出土状態



塚原3号坑遺物出土状態

受け部は短かく、斜上方にのび、口縁部は外反しながら内傾する。

Ⅲ．口径12.6cm、器高4.5cmで、体部は底部に向ってすぼまる。外底面3分の1程を筥削りして調整している。受部は短かく水平で、口縁部も短かくなり、直線的で内傾している。

Ⅳ．口径10.4～11.4cm、器高4.1～4.2cmと小型になる。外底部の筥おこし後の調整は指ナデする程度で、未調整に近い。受部は極めて小さく、口縁部は外反しながら大

きく内傾する。

Ⅴ．口径10.5～10.8cm、器高3.2～3.8cmで、底部調整や受部の状況等はⅣと同じであるが、やや浅くなっている。口縁部も一層短かく、内傾度も大きい。

Ⅵ．口径10.8～11.1cm、器高3.2～3.5cmを計る。規模や調整、形態等Ⅴとほとんどかわらないが、口縁部の内傾度が一層大きい。

以上のⅠ～Ⅵに区別した杯類を大阪府陶邑古窯跡の窯式に対応させると、ⅠがTK10、ⅡがTK43、ⅢがTK



塚原3号墳人骨出土状態(仰)



塚原3号墳人骨出土状態(南より)

209となり、これまでをおよそ6世紀代におくことができる。IV～VIについては、6世紀末以降、飛鳥II期頃まで、すなわち、7世紀の第2四半期頃までの間に納めることができよう。従って、I→VIへの変遷をたどることができ、各々の期間に長短はあるが、少なくとも杯類で見限り、6次にわたる埋葬を考えることは可能である。

ハ. 3号墳

両裾式の横穴式石室である。石室長軸は、N69°Eの方向にあり、西へ開口する。現存長8m、玄室の長さ4.9m、幅は奥壁部で1.5m、中程で1.6m、羨道の幅は1.16mを計る。奥壁の石材は抜き去られていたが、玄室北東コーナー部分に、その小片が原位置のまま残っていた。抜き取り穴と思われるものの状況から、大型の石材一石を使用していたものと思われる。側壁は最下段を残すのみで、玄室では、南壁の玄門石とそれに隣接する石材が抜き去られ、羨道では入口部分が破壊されていた。玄室の最奥部には、幅0.5～1m、高さ0.5～0.6mの板材の石材を2石用い、玄室長軸に直交して横位置に立て並べ、幅0.6m程の小室をつくり出している。小室を作り出す隔壁となる板石は、玄室南北側壁の奥から一石目と二石目の間に立て置かれているが、南北側壁にはさまれ、また、側壁石材設置下底面より高位、石室床面直上に置かれていて、石室の構築以後に、新たに設けられた施設と考えられる。石室床面には、割石や自然石を用いた敷石がなされていた。羨道部分には敷石が認められず、本来、玄室のみに施されていたものと思われる。この敷石は上述の小室にも及んでおり、小室の隔壁となる立石は、この敷石を除去して置かれている。敷石をも含めた石室の石材は、すべて石灰岩である。

石室内より出土した副葬品は、須恵器、鉄製品、装身具等があるが、遺存量は極めて少ない。石室内出土の須恵器片が、基壇附近から出土したものと接合しているもので、大半は、西方低地側へ流出してしまっているものと思われる。副葬品の遺存状況に対し、埋葬入骨は良好な状態で出土している。

副葬品のうちの須恵器は、提瓶1、平瓶1で、ともに、玄室北壁に接して、その中程から出土している。その他、石室内埋土中より、杯、高杯、埴等の小片が出土し、



塚原3号墳頭骨出土状態

高杯の小片は基壇附近のものと接合した。鉄製品は鏃、刀子の他用途不明のものがある。ほとんど、小室の隔壁の石材と玄室南側壁とでつくられる南東コーナー附近より出土している。装身具は、石製小玉、管玉、勾玉、金環等がある。石製の小玉は、玄室の南壁側、後述する人骨より奥壁側で一括して、さらにその東側で金環が出土している。もう1点の金環は、小室内出土の頭骸骨(C)に装着されたままの状態出土した。管玉、勾玉については、玄室内埋土中より出土したものが多いが、石製小玉の北側で3点出土している。

埋葬人骨は玄室内と小室とから出土している。玄室内

のものは、南側に沿って、入口寄りに、頭骸骨1点、その他の部位のものが、頭骸骨の入口側に一括して納められていた。右大腿骨1、左大腿骨1、腓骨か前腕骨かと思われるもの1、不詳のもの5であるが、数量的に見ても一体分の人骨と考えられる。鑑定結果では、比較的若年(ただし成人)の男性とされている。玄室奥部の小室は0.6m×1.5mの狭い空隙しかないが、この中に、少なくとも4体分の人骨が納められていた。頭骸骨4点、比較的形状の良好なその他の部位の人骨42点である。頭骸骨は、小室の北東隅に2点、小室の中央に2点あり、他の部位のものは、小室全体に散在している。



塚原2号墳出土遺物



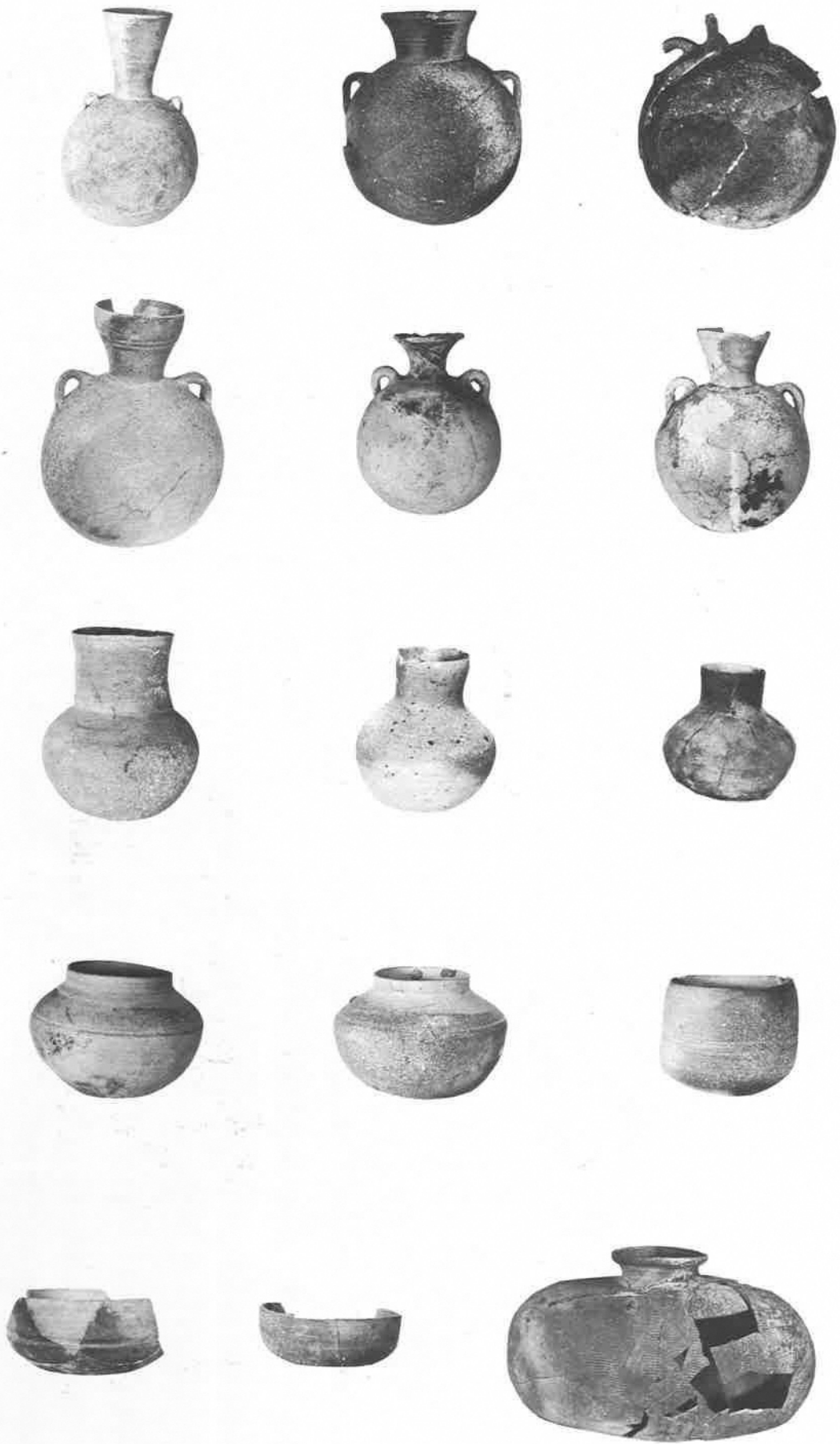
塚原3号墳出土遺物



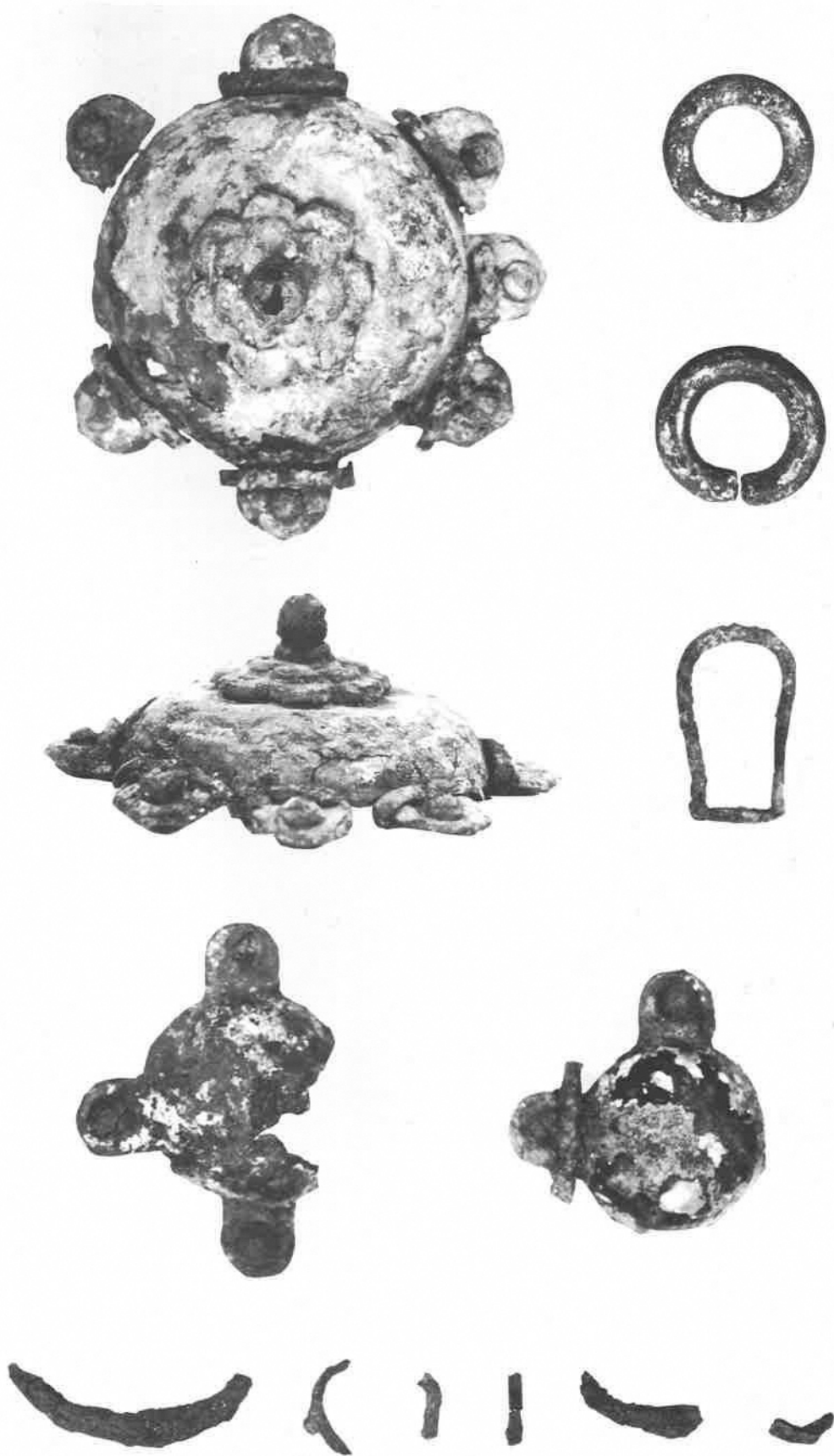
塚原 2 号墳出土遺物(1)



塚原 2 号墳出土遺物(2)



塚原2号墳出土遺物(3)



塚原2号墳出土遺物(4)

5. 竪穴式住居跡群

イ. 遺構

1号住居跡は、5.2m四方の方形のプランを持つ。四周に幅15cm程の壁溝をめぐらせるが、主支柱穴は認められない。カマドは、竪穴の北壁のほぼ中央に、北壁に対して直交する方向に作り付けられていた。煙り出し等竪穴外に及ぶ施設は認められない。出土遺物は、カマド内の焼土中より土師器の甕が1点出土したのにとどまる。

2号住居跡は、形状が不定形で、住居跡かどうか判然としない。北寄りに焼土塊があり、土師器の小片を出土したのにとどまる。

3号住居跡は、南辺分が削平されているが、東西の長さは6.2mを計る。北壁の中央部分に焼土が認められ、カマドの痕跡と考えられた。主支柱穴、壁溝は認められない。須恵器の杯、蓋、壺、皿、土師器の甕、甌等が出土している。

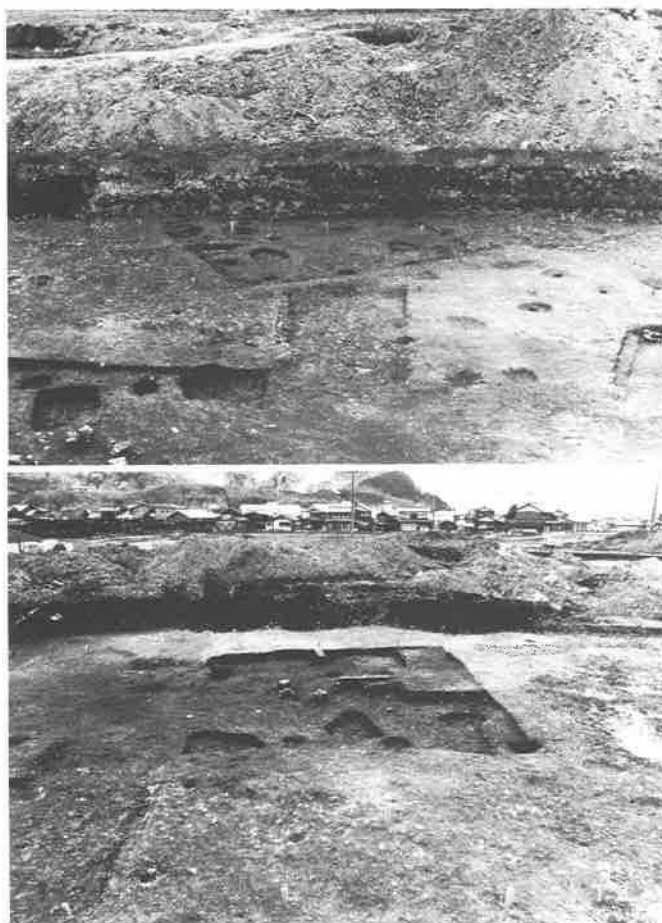
ロ. 遺物 (図8)

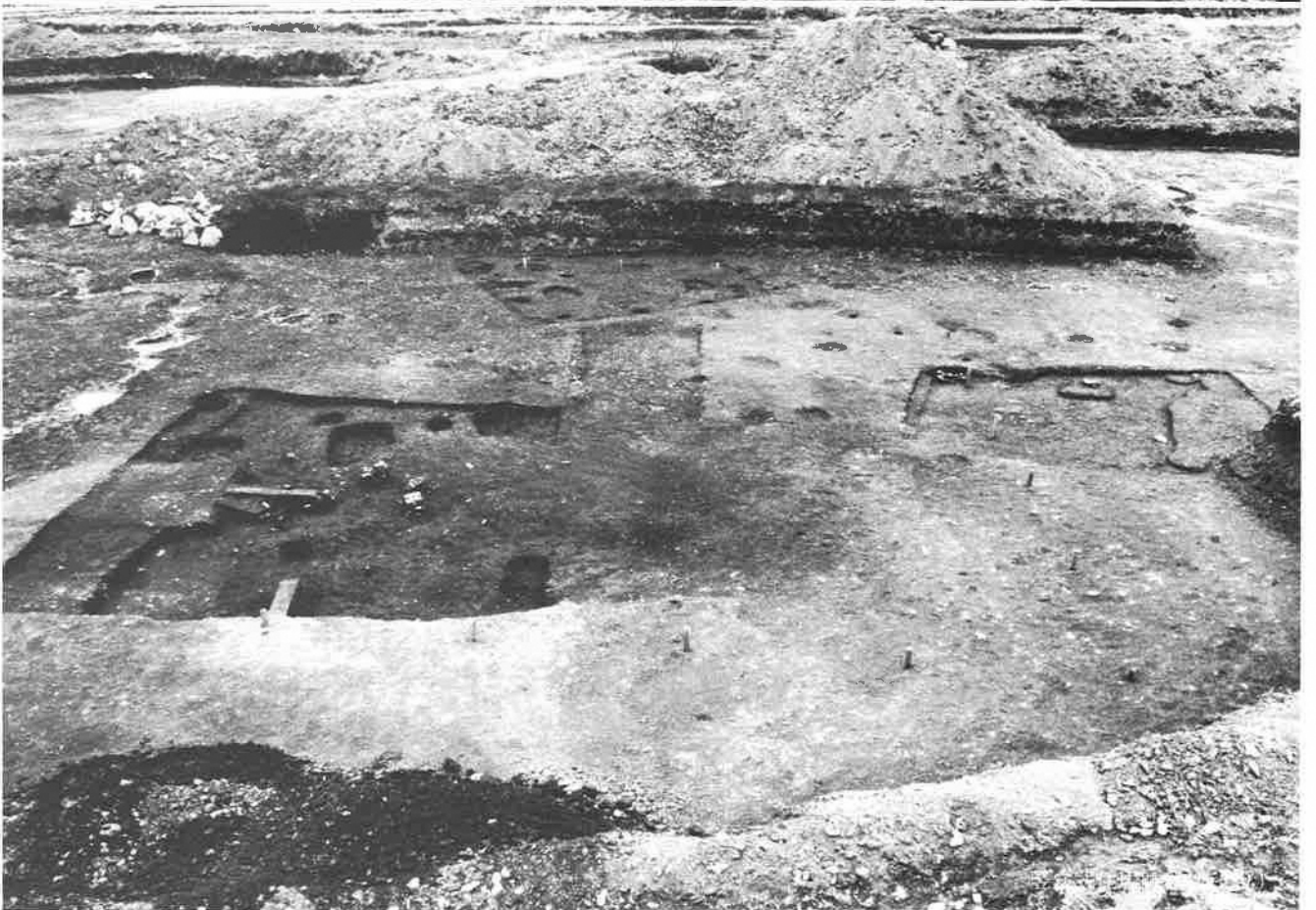
1号住居跡出土の土師器甕(2)は、口径17.5cmで、頸部は「く」の字形に屈曲し、その外側を強くナデて窪ませている。口縁部は直線的に開き、その端部を強くつまみ出している。体部外面を縦方向に、内面を横方向に刷毛目を施し、調整している。体部の形状は不明だが、肩部の状況や内面の刷毛目の方向等から、球体の体部を持つものと思われる。頸部の外面を強くナデ、口縁部下端に稜を持った屈曲部を持つものは、6世紀末～7世紀初頭頃とされる大津市湖西線関係遺跡V D区東半6号溝出土の球体の甕や長胴の甕のいわゆる近江型甕に認められるところである。

3号住居跡出土の土師器甕3点のうち2点(6・7)は、内湾して開く口縁部を上方につまみ上げ、外面に狭い面を取っており、1号住居跡出土の甕に類似した特徴を持っている。口径は19.9cmと17.8cmと大小の差がある。体部外面は、ともに縦方向の刷毛目が残るが、内面は、大型のものに横方向の刷毛目が認められる。土師器甕の他の1点(5)は、「く」の字形の頸部を持ち、直線的に開く口縁部を持つものである。体部の調整は不明である。口径は16.6cmを計る。甌(8)は、口径21cmに復元できるも

ので、口縁端部外面をナデて、内傾した窪む面を持つ。口縁部の内面は、幅2cm程をナデて窪ませている。体部は外穹気味で、外面縦方向、内面斜方向に刷毛目を施している。須恵器の杯(4)は、口縁部の内傾の強いもので、端部は外反している。受部は短かく、斜上方にのびる。蓋(3)は、口径10.1cm、器高3.7cmと小型のもの。天井部は平坦で、ナデ調整している。口縁部は内傾している。

以上の住居跡出土土器のうち、3号住居跡の須恵器杯、蓋は、奈良県坂田寺池S G 100等飛鳥II期には下り得ないであろうし、陶邑古窯跡ではTK209よりTK217に近いものとする。土師器については、1号住居跡の甕の特徴が湖西線関係遺跡の出土品の中に類例を見出せたところである。3号住居跡の甌は、7世紀前半までの住居跡から出土することが多い。このことから、住居跡群の出土土器は、6世紀末から7世紀にかけての時期を考えることができ、住居跡も土器類の示す時期としてよからう。





6. 基壇跡

イ. 遺構 (図6・7)

東西24m、南北21mと東西に長い長方形プランを持つ基壇跡である。軸線はほぼ磁北線上にあり、自然地形の整形と版築を施した盛土により築成されている。自然地形の整形は、高所側、すなわち基壇東辺より10m程東側で深さ30cm程を掘り下げ、東辺より5m附近まで緩傾斜面をもって掘り下げる。5m附近以西は、基壇の中程まで水平に削平し、基壇中程よりさらに西側は自然傾斜面を残しているようである。基壇が南西方向の傾斜面に築成されているため、版築を施した盛土は、基壇の南西部2分の1程の範囲に残っていた。北東部2分の1程は地山が露出していたが、基壇東辺部幅1.6m程の部分が削平をまぬがれ、高さ60cm程の盛土が遺存していた。基壇の西辺及び南辺で、厚さ40cm程の版築が確認できており、従って、自然地形の整形後、基壇の規模でその全面に、少なくとも60cm～100cmの厚さに盛り上げて、基壇が構

築されていたものと考えられる。

基壇の各辺に設けたトレンチから、基壇の構築状況を見てみると、東辺部では、幅1.6m、高さ60cm程残っていた基壇の盛土は、まず、4～5層にわたる盛土部分をその外側から押えるように2層を盛り足し、さらにその外側を押えて盛り加えられている。遺存していた範囲で見ると、西辺及び東辺で認められるような版築状況にはない。他辺の状況から推して、基壇端面の構築状況を示すものであろう。東辺の外側は、先述の地形整形により、幅10m程にわたる堀状の窪みとなっているが、その最深所から基壇の傾斜面にかけて、多量の瓦の集積が認められた。南辺部では、9層にわたり水平堆積させた版築が認められた。版築部分の外側、幅1.8m程の間は、版築部分より20cm程深くなっており、版築部分を外側から押えるように、11層にわたる盛土が認められた。南辺部でも、盛り足された土層の上面、基壇端面の傾斜部分に多量の瓦の集積が見られた。西辺部分では、基壇基底面が緩傾斜していた。この上に、厚さ20～40cmにわたり、



基壇跡全景(西より)

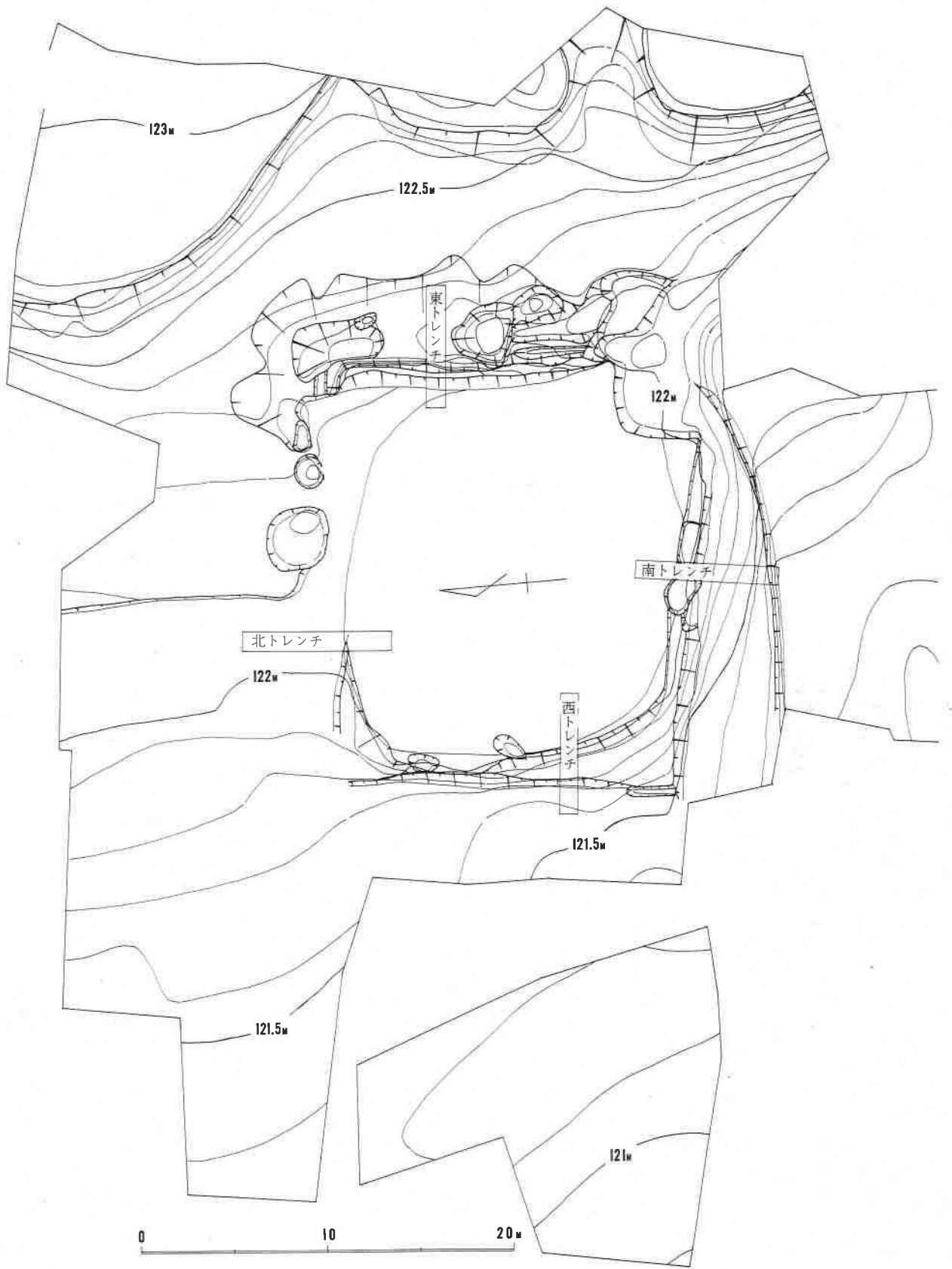


図6 基壇跡測量図

8層の版築を施し、その上面を水平にしている。この水平面を作った版築層の上に、さらに、4層の版築を斜めに施した後、4層にわたる版築を水平に施している。基壇端面の状況は不明だが、基壇の基底面が版築層の外側で20cm程高くなっており、基壇端面整形のための工夫が認められる。西辺部にも瓦の集積が認められたが、版築上層部分の削平が大きく、東・南両辺に比べれば少ない。北辺部は、大半が地山が露出しており、基壇の築成状況は不明である。ただし、北辺部にも瓦の集積があったようで、北辺外側に多量の瓦が散乱していた。

ロ. 遺物(図8)

基壇の四周から多量に出土した瓦とその中に混在していた土器類がある。

瓦類には、平瓦、丸瓦、軒丸瓦、軒平瓦、鬼板等がある。軒丸瓦には複弁のものと単弁のものがあるが、複弁のものはわずか2片と極めて少ない。中房部分は不明だが、外区の外縁に三重圏線がめぐり、内縁はなく、界線も持たない。弁は八葉に復元できる。弁の中央に稜線を入れ、その両側に子葉を配したものである。T字形の間北トレンチ

弁がある。単弁のものはいずれも外区外縁に三重圏線をめぐらせ、八葉の弁を配するものである。これには2種類の瓦当文様がある。一つは、1+8の連珠を持った小さな中房を持ち、弁の稜を明確にし、わずかに隆起させた子葉の見えるものである。他のものは、中房の規模はかわらないが、連珠は1+4となっており、弁に稜はなく、棒状の子葉が明瞭に見えるものである。これはわずか2片で、軒丸瓦のほとんどは前者のタイプである。軒平瓦は、すべて無顎で、四重弧文である。鬼板は2点ある。上縁は弧形を描き、側縁はほぼ垂直線となっている。下縁は、中央とその両側を弧形に切り落している。裏面に把手が付き、表面は無文である。下縁の形状から入母屋あるいは寄棟の庇のコーナーの先端に付くものと思われる。

土器類には、須恵器の杯、蓋、台付長頸壺、甕等がある。このうち、杯と蓋についてみると、蓋には、口縁部にかえりのあるもの(2)とかえりを持たないもの(1・4・7)とがある。かえりを持つものは、同心円復元して、口径15.7~18.7cmを計る。天井部まで知れるものでは、

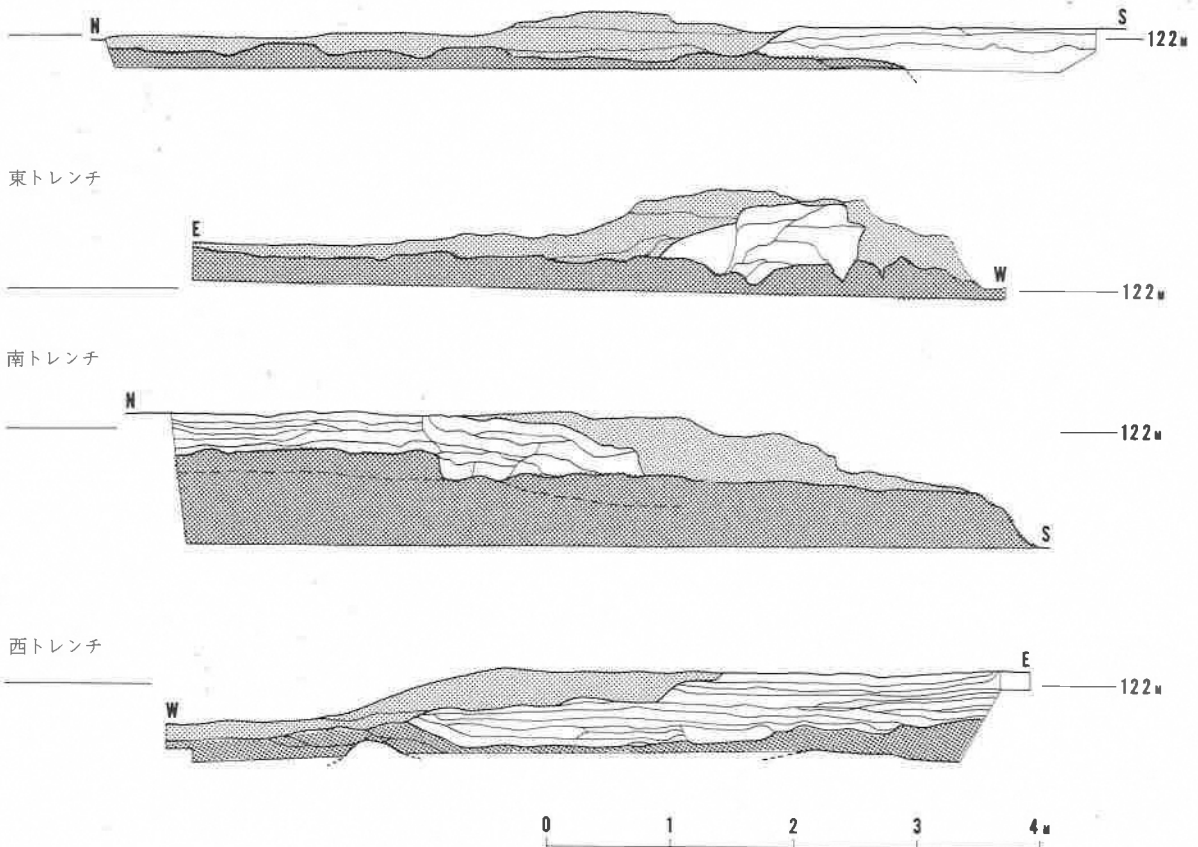


図7 基壇断面土層実測図(白ヌキが版築部分)



基壇跡全景（原址稍除去前、東より）



西側



基壇南側



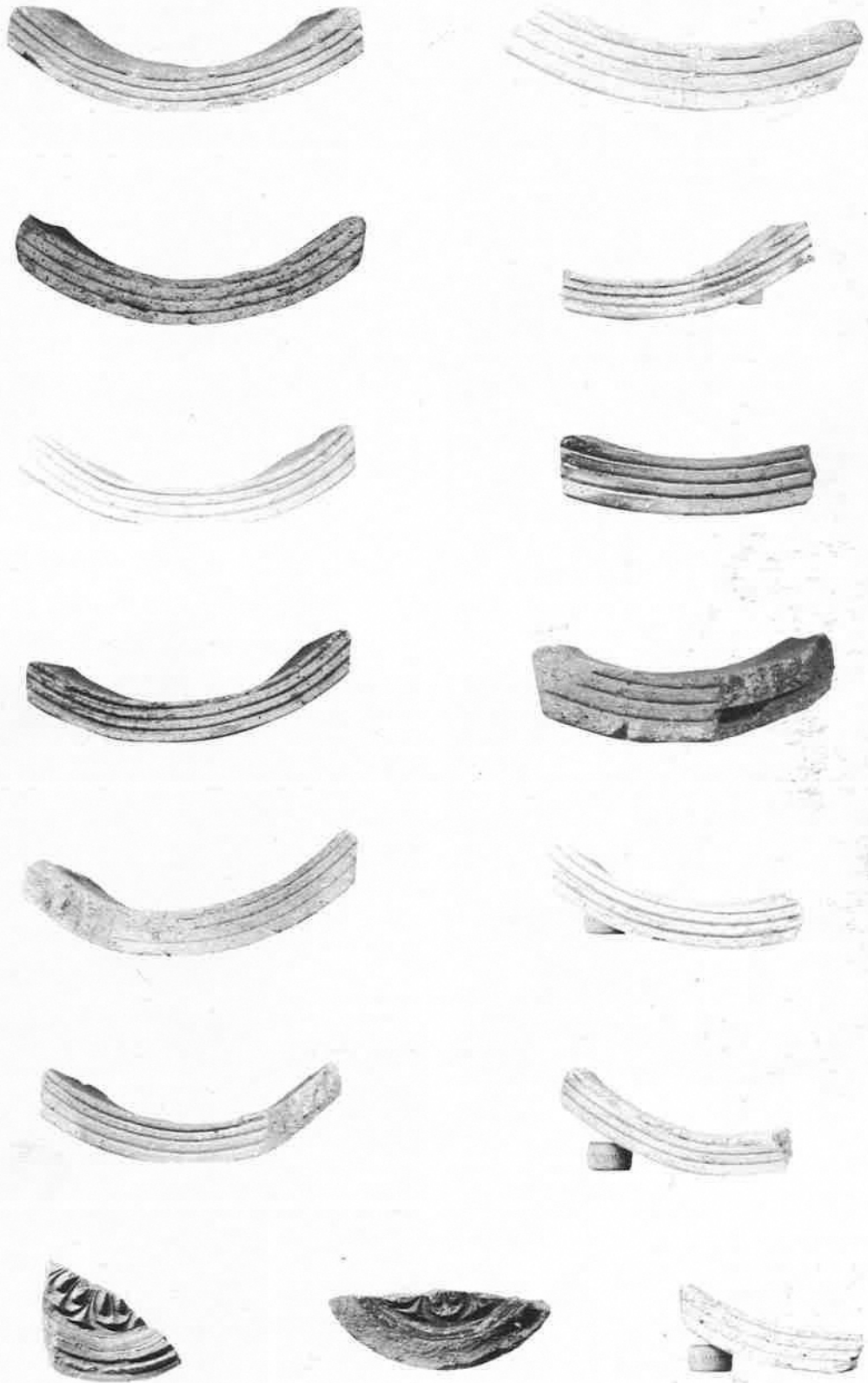
西側出土の石版



西側出土の石輪



軒丸瓦



軒平瓦·軒丸瓦

つまみを除いた高さが1.7~1.9cmで、扁平である。つまみは中高のやや大振りのものが付いている。天井部と口縁部との区別はなく、天井部はゆるやかな曲線を描いて口縁端部に至っている。口縁部のかえりは、口縁部を折り返すのではなく、小さくつまみ出し、外側へ返している。かえりを持たないものは、口径16.2~17.2cmで、規模に大差はない。天井部がゆるやかな曲線を描き、丸味のあるものと平坦なものがある。前者の口縁端部は折り曲げて垂下させ、後者では逆三角形の断面となっている。天井部に刺突文をめぐらせるものがある。杯には高台の付くものと付かないものがある。高台の付くものについては、全形は不明だが、高台の高さが0.6cmとやや高いもの(3)と0.3~0.4cmと低いもの(5・6・8・9)とがある。ともに高台は体部直下より内側に付く。高台の高いものは、体部と底部との境界の稜は甘く、外方に踏んばらせ、端部を肥厚させた高台である。低いものでは、端部を肥厚させるものと外反させるものがある。これら須恵器類のうちかえりを持つ蓋は、奈良県藤原宮跡S D 1901-A下層出土のものの中に類品がある。S D 1901-A下層は、天武朝末年から藤原宮大極殿院造営に伴う整地工事によって埋没するまでの間に投棄されたものとされ、飛鳥Ⅳ期に相当する。S D 1901-A下層からは、かえりを持たず、口縁端部を折り曲げて垂下させているものも伴出している。口縁部にかえりを持たない蓋の中には、平城宮跡S D 1900出土のものに近似した特徴を持つものがある。杯については、高台の高いものが藤原宮跡S D 1901-A下層出土のものに近似している。高台の低いものも、藤原宮期から平城宮跡第Ⅰ期頃の中に納まる特徴をそなえているものと思われる。従って、杯、蓋ともに同じ時期幅を持つと考えられる。飛鳥第Ⅳ期は、藤原宮跡S D 1901-A下層に代表させれば、最もさかのぼらせて西暦685年、平城宮跡S D 1900は701年から715年の間に投棄された一括遺物を出土しているとされているから、最大幅を取って、685年から715年の間に納めることができる。このことは、出土した瓦の年代幅を示すだけでなく、早くて天武朝末年に堂の建立がなされ、おそくて715年頃に堂が廃絶したことを示すものであろう。

7. 掘立柱建物群

イ. 遺構

	規 模		面 積 m ²	方 向
	間数(南北×東西)	規模(南北×東西)m		
SH 1	4 × (2)	6.2 × (3.8)	23.56	N13°E
SH 2	4 × 3	6.7 × 4.1	27.47	N20°E
SH 3	4 × 3	7.3 × 4.1	29.93	N12°E
SH 4	3 × 2	5.7 × 4.3	24.51	N13°E
SH 5	4 × 3	6.6 × 4.4	29.04	N23°W
SH 6	(4)×(2)	(5.7)×(4.4)	25.08	N12°E
SH 7	4 × 3	6.0 × 4.1	24.6	N34°W
SH 8	3 × 2	5.3 × 3.7	19.61	N24°E
SH 9	2 × 3	3.7 × 5.7	21.09	N30°E
SH 10	4 × 2	6.1 × 3.8	23.18	N32°E
SH 11	3 × (2)	5.0 × ?	?	N44°E
SH 12	(3)×(2)	(5.7)×(3.8)	20.52	N13°W
SH 13	(4)× 2	(6.1)× 3.8	23.18	N28°W

()は推定

掘立柱建物は13棟検出している。3間×2間が3~5棟、4間×2間が1~4棟、4間×3間が4棟である。いずれも東柱を持たず、床面積も19.61~29.93m²と大差がない。平面形は、長辺の短辺に対する割合いが、4間のものが1.5~1.8、3間のものが1.3~1.5で、間数に応じて、桁行の長短がある。SH 1とSH 2、SH 2とSH 3とSH 4、SH 2とSH 4とSH 5、SH 9とSH 10、SH 12とSH 13がそれぞれ重複し、SH 5とSH 8、SH 7とSH 8が近接する。従って、建物は3時期以上の建替なり時期差があることになる。柱通りの方行からすれば、SH 1・3・4・6、SH 2・8、SH 9・10、SH 5・13がそれぞれ近似した方向を向いている。しかし、SH 3とSH 4とは重複しており、また、SH 9とSH 10も重複している。従って、柱通りの方行だけからすれば、建物群は9期あるいは9グループに区別でき、調査範囲では1~2棟で単位を構成していることになる。

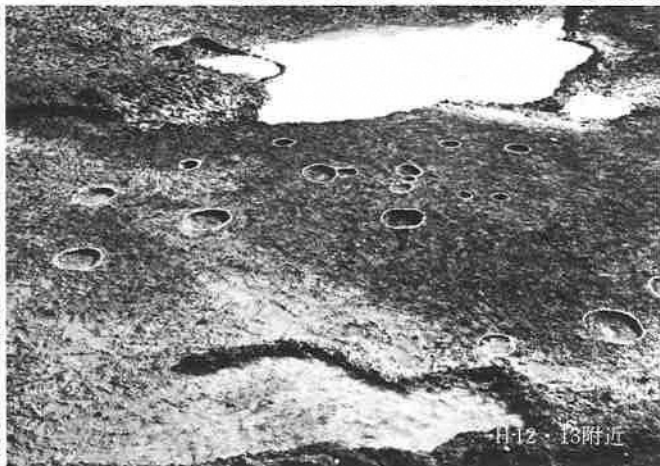
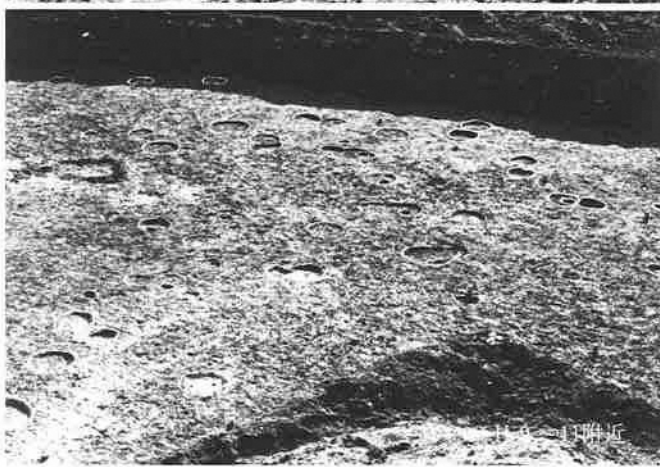
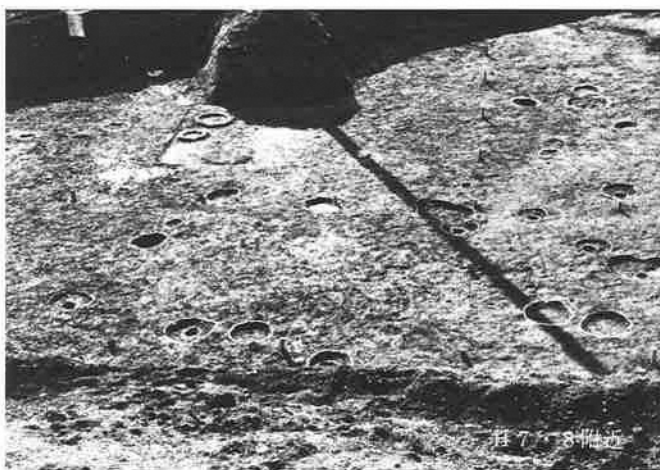
ロ. 遺物(図8)

掘立柱建物から直接出土した遺物はないが、周辺から出土したもので、竪穴式住居跡、古墳、基壇に関連するものを除外すると、土器類では灰釉陶器と山茶碗とが残る。掘立柱建物群の時期を示すものと考えてよからう。

灰釉陶器には埴(1・2)、皿(3・4)がある。埴には大小のものがある。小型のものは、口径12.3cm、器高3.9cmを計る。高台は0.7cmとやや高く、外弯している。口縁部は体部の中程より外反させている。大型のものは、高台径で7.3cmを計る。形態は小型のものと同じである。皿は、全形の知れるもので口径13.8cm、器高2cmを計る。口縁部は外反し、底部を削り出し風に厚く作り出している。

山茶埴(5・6)で全形の知れるものでは、口径17.3cm、器高4.7cmを計る。外底面に糸切痕を残し、高台は断面逆三角形の低いものが貼り付く。

上記の灰釉陶器の埴は高台を外弯させたもので、愛知県猿投窯跡の折戸53号窯式に相当するものと考えられ、皿についても同様であろう。山茶埴は、低い逆三角形の高台が付き、東山G-105号窯式に相当しよう。灰釉陶器と山茶埴の間を埋めるものの出土をみていないが、これら土器類が掘立柱建物群の時期幅を示しているものと考えて大過なからう。



掘立柱建物跡



塚原3号墳・竪穴式住居跡・基壇跡、その他出土遺物

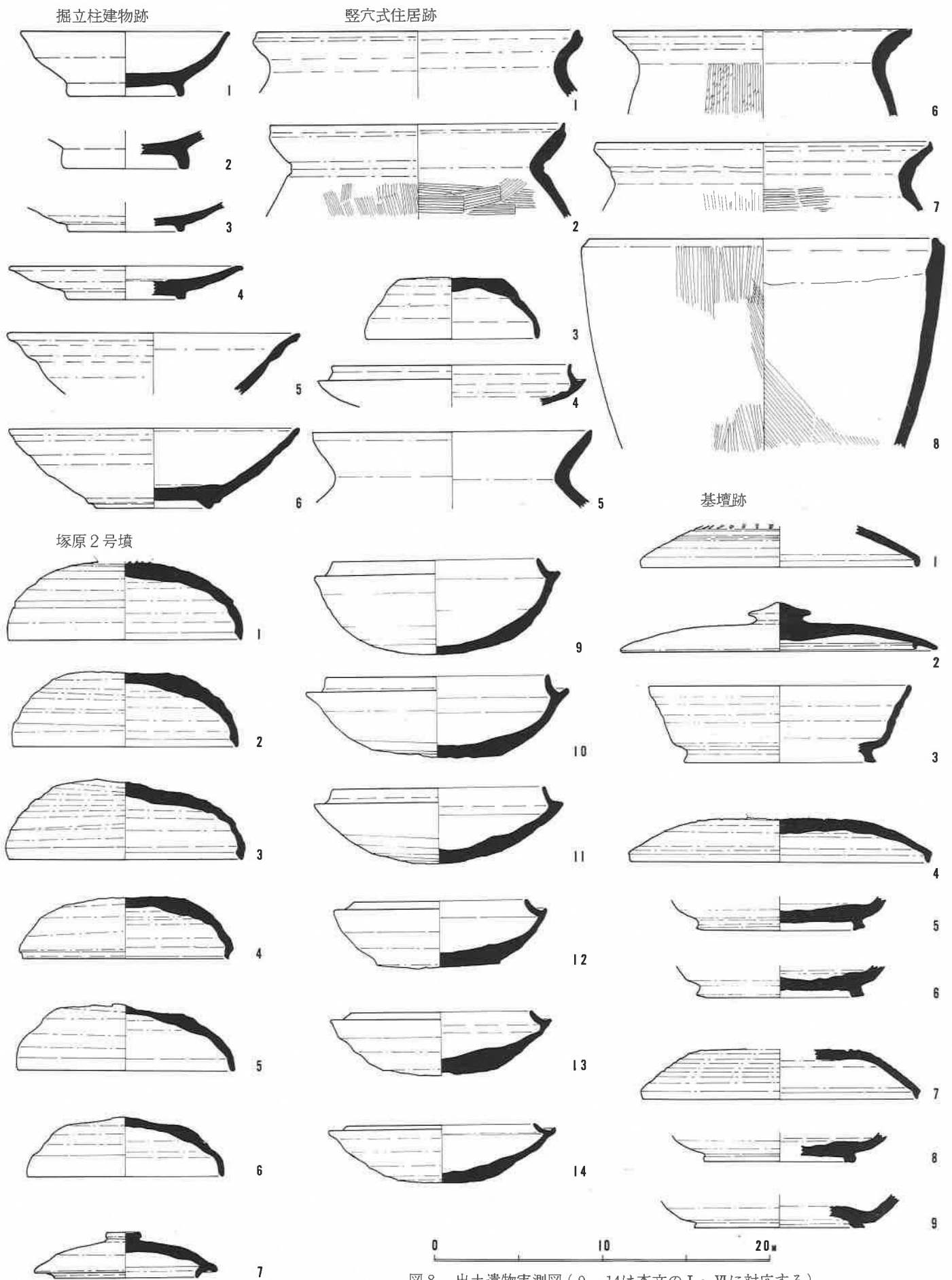


図8 出土遺物実測図(9~14は本文のI~VIに対応する)

8. 総括

イ. 塚原古墳群

埋葬人骨の遺存状態が極めて良く、2号墳で7遺体で6次の埋葬、3号墳で5次5遺体の埋葬が考えられた。これら被葬者で注意すべきは、被葬対象が成人男性であることである。2号墳で女性が1体含まれるが、壮年男性と同時埋葬であり、未成年が1体分あるが10代の後半であり、成人としてよい。幼年や女性が埋葬の対象でない点注意に値しよう。当古墳群の特徴としては、玄室奥部に設けられた小室がある。2号墳では1体のみであったが、3号墳では4遺体が納められている。構築状況から、第2次埋葬時に作られ、第1次の遺骨を納めたものと考えられ、3号墳では埋葬毎に遺骨を納めたものと思われる。改葬にも似た風習といえる。副葬品に関しては、2号墳で見ると、第1次から6次まで、土器類については大差ないセットで副葬されているが、他のものに関しては、第1次埋葬人骨と考えられるものに装身具の着装が見られた。3号墳でも小室内の中央の頭骸骨に金環が付く。馬具や鉄製品についても、少なくとも最終被葬者には伴わないようであり、埋葬の簡略化の傾向が伺える。

ロ. 竪穴式住居跡群

住居跡群の時期を6世紀末～7世紀初頭と考えたが、塚原古墳群の2号墳の最終埋葬が7世紀第2四半期頃と考えられ、古墳群と密接に関連する集落としてよい。このことから、集落としての存続期間は長く考える必要がある。集落は基壇の下層にも及んでいるが、基壇は7世紀第4四半期頃に構築されており、両者の時期的な流れから、少なくとも基壇及びその周辺の住居群は、基壇の構築を契機として廃絶している可能性がある。ただ、古墳への最終埋葬の時期と基壇築成時期との間に空隙が認められ、この間に壬申の乱(672年)が起きている。当遺跡群の所在する醒井の地は、日本書紀天武天皇元年条の記事に見るように戦場と化しており、乱との関連も注意すべきであろう。

ハ. 基壇跡

出土した土器類から7世紀第4四半期から8世紀初頭

までの時期を考えた。基壇は、東西にやや長く、80尺×70尺の規模を持つが、建物は、瓦の出土状況や鬼板の形状から、四面に庇のある入母屋あるいは寄棟の形態を取っていたものと考えてよからう。使用された軒瓦は、ほとんど単弁八葉軒丸瓦と四重弧文軒平瓦であった。わずかに異形のものがあるが、差し替えとしてよからう。醒井小学校々地から出土した本薬師寺系の複弁のものや扁行唐草文を持つ軒瓦は1点も出土しておらず、両地域の堂宇の性格については今後とも検討を必要としよう。また、検出した基壇以外に、周辺に建物の存在は考えられなかったが、醒井小学校々地においても、瓦の出土位置から見る限り、少なくとも瓦葺建物は1宇のみである可能性が強く、三大寺遺跡を単純に寺院跡とすることにも慎重を期す必要がある。今回検出した基壇跡は、極めて単期間で廃絶されている。建物の痕跡は認められなかったが、長浜市大東遺跡においても、当遺跡群と同系統の瓦を出土し、出土土器から当基壇と並行する時期が考えられるのであるが、奈良時代前期頃にはすでに掘立柱建物による集落があらわれているのである。瓦の時期に先行する土器類や溝跡等も検出されており、当遺跡群と類似した状況が想定される。このことは、律令体制の整備とのかかわりを考えさせる。基壇を伴う堂宇の建物が時期的に見て壬申の乱の結果を契機としていると考えることは可能だが、その廃絶が当遺跡群だけでなく、大東遺跡においても同様の状況が伺えるのであり、単に崇仏者の氏寺的な性格を持たせ、崇仏者の盛衰のみによるとするより、政治的な契機による廃絶を考えてみる必要があるであろう。

ニ. 掘立柱建物群

1～2棟を単位に、平安時代後期に形成された集落と考えられた。基壇の廃絶後、相当期間土地利用されなかったと思われるのであるが、新たな集落の形成は、周辺の荘園経営との関連を考えさせる。

鑑 定 書
(米原町塚原古墳群出土人骨)

滋賀医科大学法医学教室

龍 野 嘉 紹

鑑 定 書

米原町塚原古墳群出土人骨について、昭和58年3月12日滋賀県教育委員会教育長は私に対して下記事項の鑑定をするように依頼した。

鑑 定 事 項

年令、性別、人骨の部位、遺体数、その他の特徴

依って滋賀医科大学法医学教室剖検室において必要な検査を行い、その結果に基きこの鑑定書を作成した。

塚原2号墳

骨番号	発掘年月日	検 査 結 果
1	83, 02, 16	右脛骨 長さ31.0cm 男性(推定)
2	"	右大腿骨 長さ20.0cm 男性(推定)
3	"	左大腿骨 長さ26.2cm 男性(推定)
4	"	左大腿骨 長さ33.0cm 男性(推定)
5	"	左大腿骨 長さ32.0cm 男性(推定)
6	"	右尺骨 長さ22.0cm 男性(推定)
7	"	右大腿骨 長さ31.4cm 男性(推定)
8	"	左大腿骨 長さ42.5cm 男性(推定)、推定身長162~164cm、比較的若い(?)
9	"	右腓骨 長さ18.6cm 男性(推定)
10	"	左尺骨、左橈骨：長さ尺骨12.5cm、橈骨11.8cm 男性(推定)
11	"	右上腕骨 長さ23.5cm 男性(推定)
12	"	上腕骨の一部(左右不詳) 長さ6.5cm 男女不詳
13	"	右橈骨の一部 長さ4.5cm 男女不詳
14	"	右上腕骨の一部 長さ9.0cm 男性(推定)
15	"	右尺骨(?)
16	"	右橈骨の一部 長さ9.0cm 男女不詳
17	"	右上腕骨 長さ24.5cm 男性(推定)
18	"	右橈骨の一部 長さ8.5cm 男女不詳
19	"	左尺骨 長さ19.2cm 男性(推定)
20	"	左上腕骨 長さ26.5cm 男性(推定)
21	"	右上腕骨 長さ27.2cm 男女不詳
22	"	左脛骨 長さ24.5cm 男女不詳
23	"	右腓骨 長さ17.1cm 男女不詳
24	"	左腓骨 長さ12.5cm 男女不詳
25	"	右腓骨 長さ17.6cm 男女不詳
26	"	右大腿骨 長さ31.0cm 男性(推定)
27	"	左大腿骨 長さ30.5cm 男女不詳
28	"	右脛骨 長さ27.5cm 男女不詳

骨番号	発掘年月日	検 査 結 果
29	83, 02, 16	不詳 長さ18.5cm
30	"	不詳
31	83, 02, 17	右上腕骨 長さ22.0cm 男性(推定)
32	"	左上腕骨 長さ23.5cm 男性(推定)
33	"	右大腿骨の一部 長さ20.5cm 男性(推定)
34	"	左脛骨 長さ16.3cm 男女不詳
35	"	右上腕骨 長さ31.0cm 男女不詳
36	"	右大腿骨の一部
37	"	不詳
38	"	不詳
39	"	右大腿骨の一部 長さ8.5cm 男性(推定)
40	"	腓骨(左右不詳)長さ12.0cm 男女不詳
41	83, 02, 19	右大腿骨 長さ31.5cm 男性(推定)
40: 2号墳		上腕骨の一部 男女不詳
65	83, 03, 03	橈骨又は尺骨 長さ14.5cm 男女不詳
2号墳 一括	83, 03, 04	大腿骨の一部 長さ12.7cm、上腕骨の一部 長さ16.4cm、左脛骨 腓骨 長さ24.2cm 男女不詳
2号墳 一括	"	腓骨などの細片12個
頭部A	塚原2号墳	<p>頭蓋は、左右方向から圧迫され、それによって左右頭頂骨、側頭骨などは、高度に粉碎骨折している。特に右の頭頂骨、側頭骨は原型をとどめない。さらに顔面骨は、原型をとどめず下顎骨が全体に上方に反転してオトガイが上方に向き、前頭骨に近づいている。</p> <p>頭蓋全体は、大きく、下顎骨は厚く、粉碎骨折した頭頂骨なども厚さは厚い(0.9cm)。その他、外後頭隆起が高度に突出している。</p> <p>冠状縫合の融合の程度は不明である。矢状縫合は、後部において約2~2.5cmがほとんど融合している。左右人字縫合は、正中寄りの部分が融合し、その長さは左が約3~3.5cm、右が4.5cm融合している。左右乳様突起は大きく、以上の所見から、明らかに男性であって、年齢は少なくとも50歳以上と推定する。</p> <p>下顎歯は、左犬歯、第1、第2小白歯が残存しているが、咬耗の程度はかなり進んでいるものと考えられる。その他、大後頭孔は大きい。</p>
頭部B	塚原2号墳	<p>頭蓋穹隆部でかなり原型をとどめている。前後最大径16.8cm、左右最大径14.9cmであり、冠状縫合、矢状縫合および人字縫合の各縫合は細い。又いずれの縫合も融合していない。</p> <p>左右の眉弓は全く隆起せず、外後頭隆起も突出の程度は軽度である。以上の諸所見から、比較的年齢は若く(40歳以下)、女性と推定する。ただし小児ではない。</p>
頭部C	塚原2号墳	<p>左前頭骨、左後頭骨はかなり残存しているが、左頭頂骨、左側頭骨はほとんど認めない。縫合の融合の状態は不詳である。</p> <p>左上顎歯は6本残存している。すなわち、犬歯から第3大臼歯までである。右上顎歯は5本残存している。すなわち、第1小白歯から第3大臼歯までである。咬耗の程度は軽度である。歯牙の大きさは</p>

比較的大きい。

以上の諸所見から、男性であって恐らく20歳以上であろうと推定する。その他、左右乳様突起が大きい。

塚原3号墳

骨番号	発掘年月日	検 査 結 果
2	83, 03, 03	右大腿骨 長さ15.5cm 男女不詳
3	〃	骨細片 部位不詳
4	83, 03, 04	腓骨か前腕骨か 長さ12.0cm
5	83, 03, 03	大腿骨の一部 左右不詳
6	〃	左大腿骨 長さ20.5cm 男女不詳
7	〃	不詳
8	〃	不詳
9	〃	不詳
11	〃	不詳
表 採	83, 02, 22	大腿骨片多数 左右不詳

頭部A 塚原3号墳 左右頭頂骨の前約1/3と上顎歯、下顎歯などを残すのみである。縫合の所見は全く不詳である。歯牙は大きく、咬耗の程度は軽度で虫歯を全く認めない。以上の諸所見から判断して、男性で比較的若年者であると推定する。

塚原古墳出土歯牙計測値

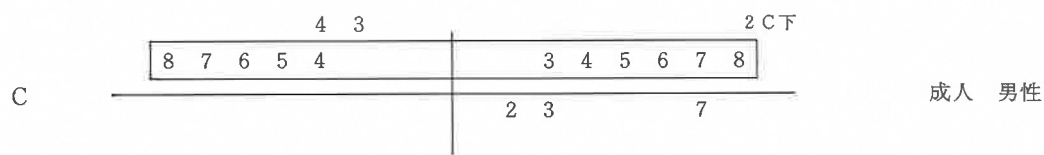
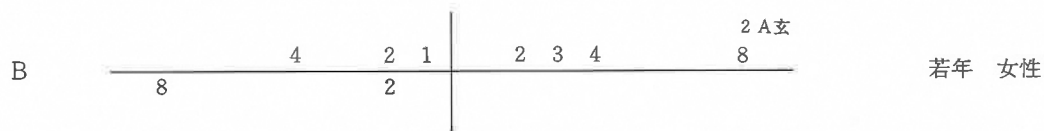
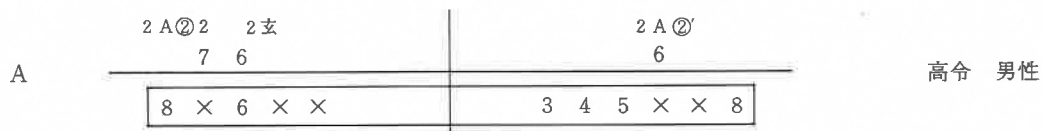
塚原 2号墳

	整理番号	歯種	冠長	冠幅	冠厚	根長	全長	備考	写真	X線
2号墳頭骨A	① 1	6	6.2	9.8	10.4	—	—	遠心頬側咬頭を除き強い咬耗、根なし、根長計測不能	○	○
	2	2	9.9	6.3	6.4	15.0	24.3	切端部なし、舌側隆線明瞭、髄腔広		
	3	6	6.0	10.9	10.3	—	(10.7)	咬耗高度、近心舌側咬頭の咬耗軽度、近心面は凹窩的	○	
	4	5	6.1	7.6	8.8	—	(11.3)	頬側咬頭咬耗高度、歯頸部狭窄、板状根	○	
	5	5	7.5	7.5	8.5	—	(11.8)	歯頸部狭窄	○	
	6	6	6.8	10.7	10.2	—	(14.3)	近心頬側咬頭咬耗高度、舌側咬頭咬耗軽度、近心が凹根折 (成人男性的)	○	
附近	① 1	6	5.3	—	10.5	13.3	18.2	近心半分咬合面咬耗高度、髄腔閉塞(高令?) セメント剝離著明	○	○
	2	7	—	—	(9.6)	(10.5)	14.5	同上、根尖破折 (高令成人男性的)	○	
2号墳玄室	A 1	1	11.8	8.1	7.2	—	(16.5)	根 $\frac{1}{2}$ 破折、歯周条波		○
	2	2	8.5	6.4	5.4	10.3	18.8	歯冠發育葉著明		
	3	8	5.8	9.3	10.3	(4.5)	(10.3)	歯冠変形、根未完成(未完成歯?)		
	4	8	7.7	10.2	10.2	—	(11.1)	根未完成、髄腔広(同上)		
	5	4	8.3	7.1	10.0	—	(8.3)	近心辺縁隆線咬耗、根歯頸より破折(同上)		
	6	7	4.5	8.2	8.5	(10.5)	(13.4)	歯冠 $\frac{1}{2}$ 咬耗又は破折、根尖部セメント剝離 (高令?)		
頭骨A	11	3	10.1	5.5	7.8	17.6	27.6	頭骨A下顎骨に植立ただし崩壊(11~13)、遠心歯冠斜めに破折崩壊、近心セメント肥厚		○
	12	4	11.0	6.7	7.6	11.5	21.6	咬耗高度		
	13	5	10.0	5.6	7.6	11.3	21.3	咬耗高度 (高令成人男性的)		○

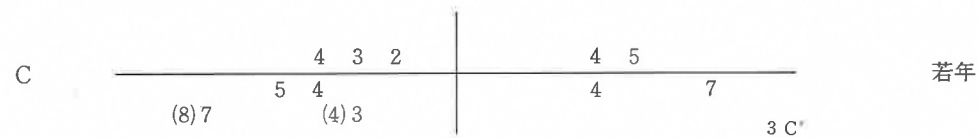
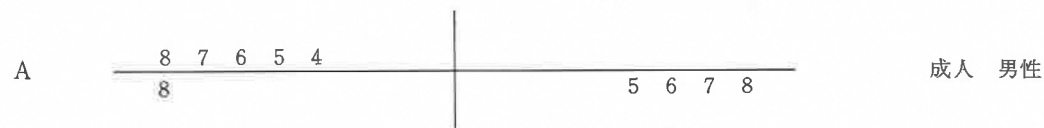
	整理番号	歯種	冠長	冠幅	冠厚	根長	全長	備考	写真	X線
2号 填頭部 B	B 1	3	9.65	8.2	8.5	15.2	23.4	近心切縁咬耗、唇面エナメル横縞、やや形成不全?、髓腔広	○	○
	2	2	9.3	8.1	6.2	10.9	20.0	根尖破損、セメント剝離	○	
	3	4	6.1	7.4	9.3	12.1	18.35	根尖破綻、舌面歯頸横縞	○	
	4	2	8.9	6.75	6.2	11.4	19.7		○	
	5	3	11.0	7.15	8.4	14.15	23.15	切端咬耗、歯冠横縞やや陥凹、根尖軽度崩壊 髓腔広、尖頭 (全体として咬耗軽度、若年女性的)	○	
2号 填頭部 C	2 C 1	3	8.95	7.15	8.1	13.6	21.2	上顎骨に植立したまま、但崩壊的	○	—
	2	4	7.6	7.1	9.7	9.3	12.9			
	3	5	7.9	7.4	10.0	10.9	18.7			
	4	6	7.3	11.0	10.5	10.8	18.0			
	5	7	7.8	9.6	10.6	11.5	19.4			
	6	8	7.25	8.3	9.2		16.15			
	7	4	7.55	7.0	9.15			崩壊性、計測困難	○	—
	8	5	7.2	7.0	9.40			崩壊性、計測困難		
	9	6	7.1	10.35	10.6		19.6	崩壊性、計測困難		
	10	7	7.5	10.02	10.15		17.8			
	11	8	7.9	8.6	9.2		14.3			
2号 填頭骨C直下	2 C' 1	3	10.5	8.2	8.7	—	—	尖頭咬耗、歯頸下4mmで根破折	○	○
	2	4	7.6	7.2	9.7	—	—	舌面基底隆線咬耗(軽度)		
	3	2	4.5	5.5	5.6	10.5	15.5	唇側歯頸部歯石沈着、切縁咬耗		
	4	3	9.1	6.7	7.6	—	—	歯冠エナメルのみ(切縁近心穿孔)、根崩壊		
	5	7	7.3	10.8	10.1	(4.5)	(11.8)	頬側2咬頭咬耗、根1/2破折	○	

	整理番号	歯種	冠長	冠幅	冠厚	根長	全長	備考	写真	X線
3 号 墳 頭 部 A	3A 1	8	6.7	10.1	10.4	—	—	近心頰側咬頭、遠心舌側咬頭破折 透心頰側咬頭咬耗、根破折崩壊 近心辺縁隆線咬耗 5咬頭、根½破折 咬合面dryopithecus pattern 同上、全体に咬耗高度 咬合面溝、plus pattern, 頰面清caries (grale 2) (全体に成人男性的)	○	—
	2	7	7.4	10.15	11.1		(16.8)			
	3	6	6.2	10.15	11.7					
	4	5	8.0	6.7	9.25	13.0	20.0			
	5	4	7.9	7.2	9.25					
	6	8	5.6	10.8	9.9				○	
	7	5	8.0	7.3	8.35					
	8	6	5.9	11.45	9.9					
	9	7	7.0	11.2	10.9					
	10	8	7.1	10.4	10.15					
3 号 墳 頭 骨 C	3 C 1	4	9.05	7.75	10.25	12.8	20.5	近心辺縁隆線、頰側咬頭咬耗 齒頸よりエナメル剝離傾向、根面粗造、髓腔広 根尖や崩壊 同上 咬耗軽度、根尖分岐(2分)、髓腔大 頰側咬頭咬耗高度、咬合面類円形、根尖やや崩壊、舌側面隆線咬耗 全体に咬耗、齒頸部狭窄高度 咬耗なし、根尖崩壊(未完成) 髓室腔広 (若年(ただし成人) 男性的)	○	○
	2	3	11.35	8.3	9.05	(16.7)	27.35			
	3	2	10.18	7.5	6.55	13.1	23.6			
	4	4	8.9	7.65	9.2	14.35	22.5			
	5	5	8.2	7.75	9.55	16.15	23.5			
	6	4	6.1	8.1	9.65	12.15	18.5			
	7	5	7.0	7.8	9.5	13.7	19.45			
	8	7	8.05	11.35	10.25	(9.85)	17.7			
表 採	3 C' 1	4	8.8	7.5	8.0	(13.3)	22.1	3 に類似、頰側咬頭咬耗、根尖崩壊 8 の可能性あり、根未完成、髓室腔広 根中央部より崩壊 (若年女性的)	○	○
	2	7	6.9	10.3	9.2	(4.1)	11.0			
	3	4	8.9	7.0	7.3	(6.0)	14.8			

2号墳



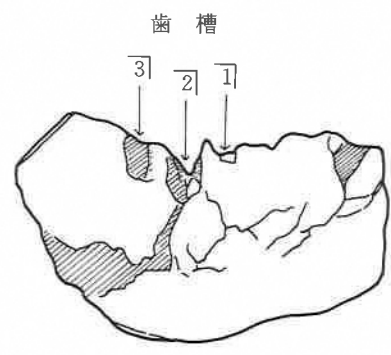
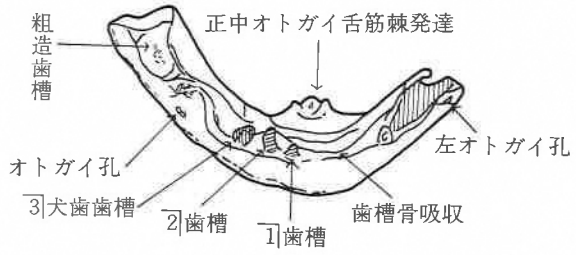
3号墳



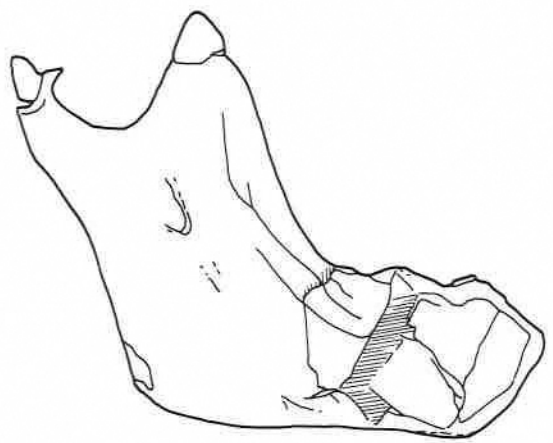
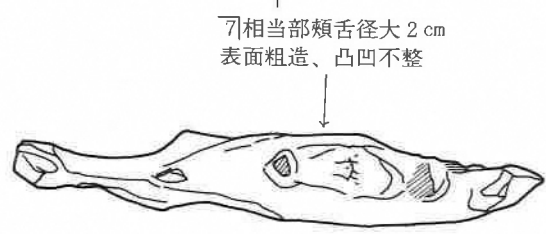
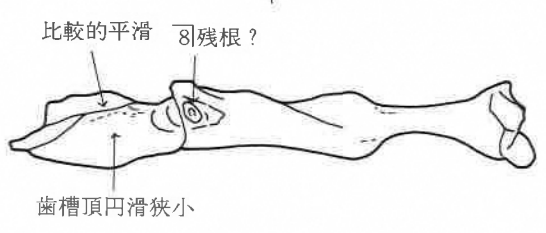
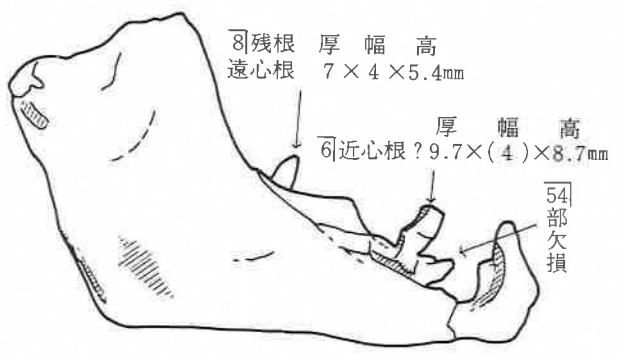
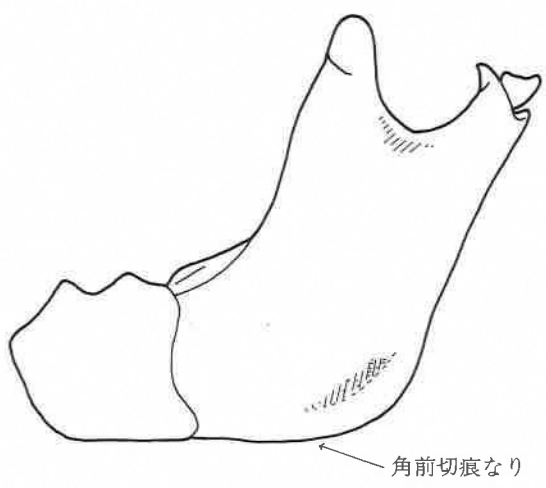
塚原2号墳頭部A下顎骨

整理番号 (上条)	計測項目	計測値	
102	下顎頭幅	—	
103	筋突起幅	—	
104	下顎角幅	—	
105	前下顎幅	50.7	△
106	下顎長	—	
107	下顎体長	—	
108	オトガイ高	30.0	△
109	下顎体高	29.0	○
110	下顎体厚	—	
111	下顎体高 (M ₂)	—	
112	下顎体厚 (M ₂)	—	
113	下顎枝高	66.4	○
114	下顎最小枝高	61.4	○
115	下顎枝垂直高	64.6	○
116	筋突起高	75.3	○
117	下顎枝幅	36.8	○
118	下顎最小枝幅	37.1	○
119	下顎切痕幅	29.0	△
120	下顎切痕高	14.0	△
121	下顎枝角	118°	
122	インフラデンターレ、グナチオン 結合線と下縁線のなす角	—	
123	インフラデンターレ、ポコニオン 結合線と下顎下縁線のなす角	—	
124	筋関節突起続の傾斜角	77°	△
125	インフラデンターレより歯槽縁線に 垂直に立てた垂線と下顎底切線のなす角	—	
126	下顎基底角	—	

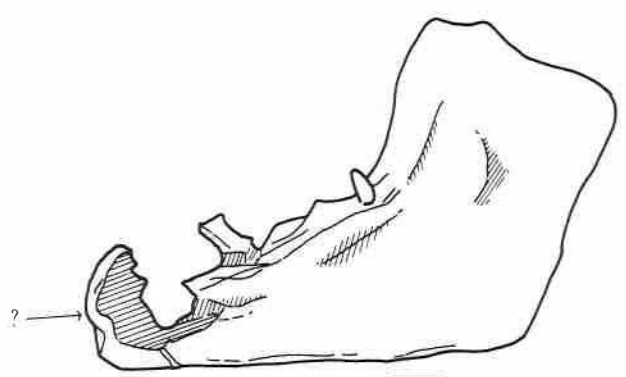
○大
△小



『下顎断片』 (歯牙形態、喪失状態、下顎骨形態、大きさより高令者男性)
 右下顎骨髓炎後状態? (86) 腐蝕より継発?)



『下顎断片(左)』



『下顎断片(右)』 (全体として876骨髓炎後状態) 54|部骨硬化(上記による)状態?)

塚原古墳出土歯牙の計測は、滋賀医科大学口腔外科
佐藤 匠 教授のご協力を得た。

この鑑定は昭和58年 3月12日着手
同年 9月 8日終了

昭和58年 9月 8日
滋賀医科大学法医学教室

龍 野 嘉 紹

おわりに

伝承と瓦の出土のみが長い間注意されてきた遺跡であったが、今回の調査によって、その性格の一端を明らかにすることができた。古墳群については、新たに2基を発見したにとどまらず、予想外の遺存状況にあり、特に残ることの極めて少ない埋葬人骨がほぼ全遺体数検出された。また、被葬者の集落を確認することもできた。さらに、寺院跡の構造や先行する古墳群、あるいは集落とのかかわり合等についても貴重な成果を得た。今後、整理作業を進め、正しく歴史の中に位置けなければならないが、とりあえず、ここに概要を報告した次第である。

1984年6月30日

米原町埋蔵文化財調査報告書 I

三大寺遺跡群

編集・発行 米原町教育委員会

印刷・製本 真陽社